2018

韓日交流 作文コンテスト

한일교류 작문 콘테스트

作品集

募集は７部門

エッセイ
日本語エッセイ部門
韓国語エッセイ・中高生部門
韓国語エッセイ・一般部門

川柳・俳句
日本語川柳・俳句部門
韓国語川柳・俳句部門

韓国旅行記
日本語 韓国旅行記部門
韓国語 韓国旅行記部門

2018

韓日交流 作文コンテスト

한일교류 작문 콘테스트

両国の皆さんに伝えたい想いを
書いてみませんか

〔主催〕駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院
〔共催〕駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院
〔協力〕韓国観光公社
〔後援〕韓国コンテンツ振興院

実施概要

事業名

韓日交流 作文コンテスト 2018

～ 両国の皆さんに伝えたい想いを書いてみませんか ～

【日程】

- 作品募集：2018 年 4 月 16 日（月）～8 月 5 日（日）
- 審査：2018 年 8 月 6 日（月）～8 月 29 日（水）
- 審査結果発表：2018 年 8 月 31 日（金）
- 受賞作展示会：2018 年 9 月 27 日（木）～10 月 10 日（水）
- 授賞式：2018 年 9 月 29 日（土）

【趣旨】 次世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句、韓国旅行記を募集し、表彰する。

【審査員】
◇ 日本語エッセイ、日本語 韓国旅行記部門
　呉英元（二松学舎大学名誉教授及び駐日韓国文化院 世宗学堂長）
　桜井泉（朝日新聞記者）

◇ 韓国語エッセイ中高生・一般部門、韓国語 韓国旅行記部門
　南潤珍（東京外国語大学准教授）
　武井一（東京都立日比谷高等学校教員）

◇ 日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門
　兼若逸之（元東京女子大学教授、駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）
　曺喜澈（東海大学国際教育センター教授）

【募集部門】　全７部門
＜エッセイ＞
　日本語エッセイ部門：中学生から一般の方までが対象
　韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
　韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

＜川柳・俳句＞
　日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
　韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

＜韓国旅行記＞
　日本語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象
　韓国語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象

【応募規定】
＜日本語エッセイ、韓国語エッセイ部門＞
　◇ テーマ（次の中から択一）
　　A「私が感じた韓国」、B「私が考える韓日交流」

＜日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門＞
　◇ テーマ
　　自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

＜日本語 韓国旅行記部門、韓国語 韓国旅行記部門＞
　◇ テーマ
　　韓国旅行（韓国旅行中に感じたことや思い出、エピソードなどを各部門の言葉で旅行記にして投稿）

【審査方法】
駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

韓日交流 作文コンテスト

審査結果（総応募作数：2,030 作）

日本語エッセイ部門（応募作数：308）

◇ 最優秀賞（1 名）
- 佐々木彩乃（九州大学）

◇ 優秀賞（2 名）
- 深沢瞳（神奈川県）
- 一ノ瀬章子（山口県）

◇ 佳作（4 名）
- 大熊萌那（二松学舎大学附属柏高等学校）
- 呉大煥（東京都）
- 野崎ターラー（大阪府）
- 小松崎有美（埼玉県）

◇ 入選（12 名）
- 田久保光紀（日本大学）
- 岡田理紗子（日本大学）
- 樫村友希子（千葉県）
- 李理奈（都立千早高等学校）
- 鈴木菜々子（湘南学院高等学校）
- 高田ひな（仙台育英学園高等学校）
- 井上夏梨（洗足学園高等学校）
- 吉原一憲（神奈川県）
- 李栄俊（電気通信大学）
- 渋谷祐熙（青山学院大学）
- 黒崎優衣（清泉インターナショナルスクール）
- 中野浩道（埼玉県）

日本語 韓国旅行記部門（応募作数：76）

◇ 最優秀賞（1 名）
- 鈴木優羽（立教大学）

◇ 優秀賞（2 名）
- 蓮池未侑（岡山県立岡山操山高等学校）
- 小松茂生（神奈川県）

◇ 佳作（4 名）
- 佐藤華（仙台白百合学園高等学校）
- 靜尚輝（智辯学園高等学校）
- 松浦歩美（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
- 徳山容子（山梨県）

◇ 入選（12 名）
- 堀育実（北海道）
- 城田智広（長崎県）
- 曽根一男（埼玉県）
- 松尾弘（神奈川県）
- 吉香月（東海大学）
- 稲冨伸明（熊本県）
- 古川小百合（熊本県）
- 柳澤範子（東京都）
- 栗原朗美子（千葉県）
- 佐々木結（鹿児島県）
- 國定昭（大阪府）
- 平手亜紀世（愛知県）

韓国語エッセイ 中高生部門（応募作数：31）

◇ 最優秀賞（1 名）
- 井上京子（長崎県立対馬高等学校）

◇ 優秀賞（2 名）
- 福田涼乃（関東国際高等学校）
- 松平佳七子（北海学園札幌高校）

韓日交流 作文コンテスト

◇ 佳作（4 名）
－ 和氣菜摘（関東国際高等学校）
－ 儀間麻梨哉（長崎県立対馬高等学校）
－ 橋本桜（桐蔭学園高等学校）
－ 荻久保花音（エムズ英会話）

◇ 入選（10 名）
－ ケートプラカン彩愛（仙台育英学園高等学校）
－ 日暮彩乃（関東国際高等学校）
－ 横溝風（関東国際高等学校）
－ 田中沙羅（関東国際高等学校）
－ 加藤萌香（北鎌倉女子学園 高等学校）
－ 犬束優詩（長崎県立対馬高等学校）
－ 奉裕娜（東京韓国学校）
－ 澤田珠希（東京韓国学校）
－ 関口朋花（神奈川県立金沢総合高等学校）
－ 白井なを子（聖心女子学院高等科）

韓国語エッセイ 一般部門（応募作数：124）

◇ 最優秀賞（1 名）
－ 山極尊子（埼玉県）

◇ 優秀賞（2 名）
－ 中山由紀子（北海道）
－ 尾崎悠子（東京都）

◇ 佳作（4 名）
－ 大木未央（千葉県）
－ 宮本香央里（東海大学）
－ 矢田智子（高知県）
－ 刀祢友梨絵（静岡県）

◇ 入選（12 名）
－ 原田節子（長崎県）
－ アヘゴコビー（栃木県）
－ 朝倉利員（茨城県）
－ 比嘉明穂（秋田大学）
－ 徳山星児（兵庫県）
－ 北山ちえみ（新潟県立大学）
－ 田中敬一朗（新潟大学）
－ 鷲田七海（北海商科大学）
－ 渡邊愛美（東京女子大学）
－ 中山栞里（国士舘大学）
－ 淺井美帆（東京都）
－ 勝田麻莉子（岡山県）

韓国語 韓国旅行記部門（応募作数：60）

◇ 最優秀賞（1 名）
－ 深井麻土香（東京都）

◇ 優秀賞（2 名）
－ 福徳ひろみ（東京都）
－ 湯澤葉子（東京都）

◇ 佳作（4 名）
－ 山本佐智子（高知県）
－ 田原彰人（埼玉県）
－ 棚澤弘美（埼玉県）
－ 矢内優香（東海大学）

◇ 入選（12 名）
－ 蓮池未侑（岡山県立岡山操山高等学校）
－ 野澤真季（都留文科大学）
－ 遠藤真砂子（東京都）
－ 本田萌香（神奈川県立横浜国際高等学校）
－ 岩本恭佳（新潟大学）
－ 竹前沙南（新潟大学）
－ 藤山恵緑（長崎県立対馬高等学校）
－ 菊池みゆき（千葉県）
－ 辻川智子（神奈川県）
－ 飯澤みくに（北海道）
－ 島田令子（東京都）
－ 古澤勲（東京都）

日本語川柳・俳句部門（応募作数：917）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 両角勝彦（東京都）

◇ 優秀賞（2 名）
– 中野弘樹（埼玉県）
– 鈴木哲也（埼玉県）

◇ 佳作（4 名）
– 村上瑛海（上智大学）
– 近藤紀巳（岐阜県）
– 青柳婦美子（栃木県）
– 藤野美保子（神奈川県）

◇ 入選（12 名）
– 大川芽衣子（新潟大学）
– 中嶋直美（富山県）
– 松下陽菜（昭和女子大学）
– 佐藤千恵子（愛知県）
– 横手友江（埼玉県）
– 足利玲弥（新潟大学）
– 松木精司（高石市）
– 桜井道子（千葉県）
– 大久保憲（福岡県）
– 中野立子（千葉県）
– 鳶田芽衣（八千代松陰高校）
– 大道望晴（鳥取県立境高等学校）

韓国語川柳・俳句部門（応募作数：514）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 柿沼新菜（上智大学）

◇ 優秀賞（2 名）
– 辰見京香（富山高等専門学校）
– 坂原瑞穂（東京都）

◇ 佳作（4 名）
– 田中優子（長崎県）
– 大島若子（福岡県）
– 岸本みさを（東京都）
– 南野成一（大阪府）

◇ 入選（12 名）
– 中里直湖（東京都）
– 呉秀芽（東京韓国学校）
– 岸井結実子（東京女子大学）
– 清水雄輝（電気通信大学）
– 南夕起子（大阪府）
– 出水良（神奈川県）
– 久保田陽子（東京都）
– 堀内百花（東京女子大学）
– 藤原奈々（東京女子大学）
– 脇坂琴（筑紫女学園高等学校）
– 杜冰潔（新潟大学）
– 藤野和成（福岡県）

賞

◇ 最優秀賞（各部門 1 名、計 7 名）
賞状、副賞（韓国への旅 3 泊 4 日をペアで）

◇ 優秀賞（各部門 2 名、計 14 名）
賞状、副賞（韓国への旅 2 泊 3 日）

◇ 佳作（各部門 4 名、計 28 名）
賞状、副賞（ブルートゥース ヘッドホン）

◇ 入選（各部門 10 ～ 12 名、計 82 名）
賞状、『韓国語学習ジャーナル hana』 1 年（6 冊）購読権利

韓日交流 作文コンテスト

作品集

最優秀賞

私が感じた韓国

佐々木彩乃〔九州大学〕

私９歳の誕生日に「プレゼントは何がいい？」という問いに「本！」と答えて母と本屋に行った日が私と韓国が初めて繋がった日です。本屋をさまよい手にした本が偶々「日本に暮らす韓国の人」についてでした。当時韓国という国を意識したこともなかった私は数ページ、パラパラと見て本を戻そうとした、その瞬間のことでした。

「あっ…！」

本は私の手をすり抜け床に落ち、角が汚れてしまったのです。

知らないふりをしようかとも思いましたが、きっと後から罪悪感に苛まれることでしょう。そこで私は

「この本を買ってください！」

と頼みました。母は

「本当にその本でいいの？」

と、なぜ突然韓国なのだろうかという表情で首をかしげつつも清算を済ませてくれました。

家に帰って、折角買ってもらったのだから、とページをめくり始めました。しかし読み終わる頃には韓国への申し訳なさ、悲しさ、自国への怒りと、疑問で私は混乱していました。

「信じられない…本当に、本当にお隣の国との間にこんな溝がある？」

「私が韓日関係の為にできることはある？」

と沢山の疑問と強い問題意識を覚えました。

私と「韓国」の出会いは決して幸先の良いものではなかったけれど、私に強い、強い衝撃を残しました。

その衝撃は消えず、大学では双方向から韓日両国の関係を考えるため、私は韓国人教授の下で韓日の繋がりを学び始めました。韓日双方の人の文を読んでは先生に疑問をぶつけ、議論しました。独島・竹島、慰安婦、歴史教科書、漁業権…多くの文献に触れ、韓国外交部のホームページを参照するにつれ徐々に韓国目線からも韓日関係を捉えられるようになりました。

そして韓国外交部と外務省が主催する日本大学生訪韓団に選抜され昨年初めて韓国を訪れました。実際に体で感じる韓国は文字で感じる韓国とは全く違いました。非常に近代的で洗練されている一方伝統がしっかりと社会に生きている、驚くほど古今の調和がなされた素敵な国、韓国。私は１度の訪問でこの国に恋をしました。

「どうして今まで来なかったのだろう！」

心底から後悔しました。

同時に韓日関係がより友好的になるために行動しよう！という思いが私の胸に刻まれました。

思い返すと韓国はいつも身近に感じられました。中高の親友は祖父母の代から日本に住んでいる韓国人でしたし大学の親友も韓国からの留学生です。中学生の頃は韓国ドラマを母と一緒に観ていました。好きなK-POPダンスを体育の授業で発表したこともありました。

確かに韓日間には消えることがない歴史があります。問題もあります。

ですが私が感じる韓国、それは悠久の歴史を大切にしつつも日々進化する国。主張する時はするけれども面倒見の良い温かい人。とても一言では表せない様々な側面を持った「お隣さん」です。

初訪韓からもう何回韓国に足を運んだことか！

これからも韓国にお世話になりながら、韓日がより互いを身近に感じられる関係を築いくことに貢献していきます。

優秀賞

つなぐと星座になるように

深沢瞳〔神奈川県〕

韓国国立中央博物館のミュージアムショップで何気なく手に取った小さなメモ帳には、별の文字がホログラム印刷されていた。黒い表紙の上では小さな星が輝いている。星空が広がっているようだった。メモ帳としては小さすぎたが、レジに並んだ。店では気づかなかったが、細い線が별と別の言葉をつないでいた。노래하는と書いてある。ハッとした。노래하는の先もつながっている。胸が高まった。次に来るのは마음으로ではないか。たどった先には・・・やっぱり！偶然手に取ったノートはなんと尹東柱の序詞の世界を表現したものであった。

尹東柱の詩に出会ったのは本当に偶然だった。私は高校2年生で、学校になじめず、さえない日々を送っていた。悶々と生活する中で読んだのが茨木のり子の「ハングルの旅」であった。そこに引用されていた尹東柱の詩に衝撃を受けた。言葉の一つ、ひとつが磨かれ、活き活きとしている。翻訳が美しいのだから、原詩はもっと美しいに違いない。独学でハングルの読み方を覚え、詩集「空と風と星と詩」も繰り返し読んだ。読むたびに自分のつまらない生活がよぎった。学校には通っていた。しかし、好きじゃなかった。心を許せる友達もいなかった。毎日が苦しかった。私の世界は真っ暗だったが、暗いからこそ、尹東柱の詩は輝いていた。

何とかしよう。そう思った私は環境を変えようと大学受験に励んだ。大学に入学した私は、韓国語を第二外国語に選んだ。韓国政治の授業も履修した。様々な動機で韓国語や韓国を学ぶかけがえのない友人に出会うことができた。

しかし、自分の気持ちと反比例するかのように、日韓の政治関係は冷え切っていった。日々飛び込んでくるニュースにいらだち、また日本人・韓国人双方の反応に反発を覚えた。しかし、悪化する日韓関係につられ、私自身も忙しさを言い訳に韓国と精神的距離を置くようになってしまった。

転機は2016年だった。私はトランジットで降り立った仁川空港で、偶然にも詩集「空と風と星と詩」に出会ったのだ。詩集を眺めながら、急に懐かしさがこみ上げてきた。暗い高校時代を照らし続けてくれた詩集。自分に新しい扉を開けてくれた詩集。ささくれ立っていた自分をなだめてくれた気がした。

日韓関係を冷静な視点で見られるようになった今、私は序詞のメモ帳を手に入れた。手中の小さなノートを見ながら、私は韓国との交流について考える。私は、尹東柱の詩に出会い、韓国を知った。詩と人との出会いに喜び、他方で政治問題に落ち込み、距離を置いた。しかし、顧みすれば、それは悪いことではなかったと思う。ネガティブな感情はむしろ私が隣国に対して深いまなざしを持つきっかけになったからである。良いことも悪いこともひっくるめて私はそれを受け入れよう。そしてつないでいこう。そうして仰ぐ空には、日韓の交流と奮闘の素晴らしい星空が一面に広がっているに違いない。

優秀賞

韓国料理には不思議な力がある

一ノ瀬章子〔山口県〕

ここに韓国料理には不思議な力がある。

市場に無造作に並ぶ、重くて厚い無骨な黒光りの土鍋＜トゥッペギ＞。いざ食卓へ登場すると意外な力を発揮する。ごちそうが並ぶ食卓に、土鍋はまるで命が宿っているかのように、いつまでもグツグツと煮え続ける。シンプルなチゲがご馳走になる穏やかな時間だ。どんな時でも熱々スープを口にすれば、不思議とご飯がすすむ。驚きはまだまだ続く。数個の土鍋が並ぶレンジ台の前で、アジュマがケランチムを作っている。沸騰した出し汁の土鍋に、次々と卵液を注ぎ、両手を使って素早く混ぜる。そしてゆっくり蓋をする。一連の作業が面白くて、土鍋の行方を追いかける。すると湯気をたてながら目の前に運ばれてきた。ブルブルと土鍋のフタが持ち上がる。促されるようにフタを取ると、フワッフワの黄金色の卵が顔を出す。しぼまないうちに熱々を食べる。そして今、手荷物重量ギリギリで手に入れた数個のトゥッペギは、日常から特別な日まであらゆるニーズに答え、我が家の食卓を盛り上げている。

韓国料理には不思議な力がある。

辛い！辛い！とつぶやきながら、おかずを口に運ぶ。しばらくすると口の中がヒリヒリ痛くなる。慌てて水を飲み干し、止まらぬ痛さと戦い続ける。舌を突出し、息を吐きながらテーブルいっぱいのおかずを睨む。＜もう辛いのはごめんだ。＞と言い聞かせるのだが、箸を持った手が、新たな期待を求めて次のおかずへと伸びていく。何度かこの動作を繰り返し、目の前の真っ赤な料理を食べ尽す。すると翌朝、辛さの食生活に慣れていない体が密かに抵抗を示すのだ。トイレに駆け込み用を足した瞬間、アッと声が漏れた。誰にも言えない辛さの洗礼を受け、やがて辛さの中に訴えてくるような旨みを感じ、知らず知らずのうちに韓国料理の虜になっていく。

韓国料理には不思議な力がある。

一人旅を続けていると、必ず誰かが＜ご飯食べた？＞と、あいさつをするように話しかけてくる。とっさの質問に、慣れない韓国語で＜まだ！＞と答えると、＜一緒に食べよう！＞とお誘いの言葉が返ってくる。躊躇する間もなく手を引かれ食卓につく。そこには特別なマナーも無ければ気取りも無い。美しさを演出する術をすべて取り除き、身近にある食材で勝負する。庭の新鮮野菜を、手でちぎり一匙のヤンニョムを加え、＜サッササッサ＞とリズムを奏でる。オンマの手はみるみるうちに真っ赤に染まる。こうして作られたおかずの数々は、驚くほど繊細な味を醸し出す。身近で見る＜美味しくするためのとっておきの魔法＞は＜私にも出来る＞という自信を与えてくれる。数種のナムルと熱々のチゲ。みんなが集まりみんなで囲む食卓に、取り皿なんて無用の長物！私は、土鍋からスープを直接口に運ぶ技に戸惑いながら・・・苦戦しながら・・・笑いが響きあう食卓へ溶け込んでいく。

佳作
私が考える日韓交流

大熊萌那〔二松学舎大学附属柏高等学校〕

私は韓国が大好きだ。韓国の食べ物、文化、伝統、景色…そしてなによりも、「우리（ウリ）」の考え方 がとても好きだ。私が韓流ドラマや映画、K–POP ア イドルの言葉を聞いていると、韓国の人は日本よりも「集団」を大切にするということが感じられる。日本人は個人主義の考えが強い一方で、韓国人である彼らは、必ずと言っていいほど「私の～」ではなく「私たちの～」と言うのだ。このような日本にはない韓国の根強い絆意識は、私にとって非常に魅力的なものであり、今の日本に必要な精神ではないかと思う。私がこう考え付いたのも日韓交流がだんだんと活発になってきたおかげだと思う。 私が韓国を好きになり始めたのは 14 歳の時だ。きっかけは韓国の歴史ドラマだった。そのドラマを機に韓国の歴史に興味を持った。主に韓国の歴史的な伝統などが好きで調べていたが、だんだんと近代の歴史にも目を向けるようになった。私は日本が戦争下でしてきたことをいろいろと学んだ。そして韓国人が日本を嫌うと言われている理由を知った。しかし、韓国人の全員が日本を嫌いだと私は思わない。中には日本を好いてくれる人もいるはずだ。少なくとも、日本の若者は韓国が好きな人が多い。私もその中の１人だ。

高校生の甘い考えかもしれないが、戦争が終わり世界が著しく変化している今、同じアジア人として韓国と日本で手を取り合うべきではないか。過去の事実は揺るがない。しかし、命は移り行き時代は変わった。我々も変わるべきだ。そのためには日韓交流が非常に重要になってくる。しかし、ただ楽しい文化の交流ではなく私が必要だと思うのは、私たち次世代を担うすべての学生が「お互いの歴史を」「お互いの視点から」「同じ場所で」学ぶ交流だ。どうしても国が違えば自国のフィルターが掛かり、見方にも偏りが生じてしまう。それを防ぐためにもこのような交流は有効ではないかと思う。しかしながら、この交流の実現には難しい問題点も多く発生するだろう。その問題の１つとして予想されるのが言語の違いである。だが、グローバル化が謳われている今、他国の言語を学ぶことは学生にとって良いことだ。「互いを知るにはまず言語から」そんなことが言われているくらいだ。この交流が実現するためにも今の大人たちには色々と変わってほしい。同じ人間、アジアの住民と考えると韓国人も日本人も「우리」ではないか。今の大人がそう思わなくても、私はそう考えたい。いや、そうなるべきだ。より互いが分かりあい、より親しく、歩み寄れるそんな時代を私たちの世代で作り上げていきたい。

佳作

私が考える韓日交流

呉大煥〔東京都〕

「えっ？あの人は何人？日本人じゃないの？このツアーって大丈夫？」
旅に参加されるお客様達の初反応はいつも同じです。僕の仕事はツアーコンダクターです。添乗員ともいいます。
珍しく日本人向けの日本国内ツアーを案内しています。今年で 4 年目ですが、今まで同じケースを見たことはありません。なので、お客様の反応は当然かもしれません。こういう反応が最初は怖くて落ち着かなかったけど、今は楽しみの一つです。問題はその次です。

バスが出発するとマイクを握って初挨拶をします。
「〇〇ツーリストの添乗員呉（オ）と申します。」するとお客様は１００％王様のオウだと勘違いし、さらに中国人だと結論を出します。
そうです。自分が知らないうちに僕は中国人の王（ワン）さんに変身します。（笑）
それで、僕はいつも「呉（オー）」と大きく書いて見せながら自分は韓国人ということ。韓国では漢字の読み方が一つであり、「呉」をオと読むこと。実は、この苗字は国際的なものであり中国、台湾、北朝鮮、そして日本にもあること、それぞれ読み方が違うこと等思いかけない国際交流は自然に始まります。

忙しい時はほぼ毎日日本全国を回りました。色んなところで様々なエピソードが出来ました。外国人添乗員という漠然な不安感もあり気まずい顔をしたお客様もいましたが、旅の中で共に歩く、話す、食べる、笑いながら心の国境は徐々に解けて一体感を感じます。

旅が終わる際、最後のアンケートで若しくは直接「今まで韓国人に対して偏見があったが、オーさんに会って変わった。よかった！楽しかった！韓国へ興味ができた！行ってみたい！」等声をかけるお方が多いです。一番やりがいを感じる瞬間です。ということで僕にとっては仕事自体が韓日交流です。

実は、僕にとってこの仕事は韓日交流の一環のであり、最終的な夢は本格的に韓日交流の橋のような役割を果たすことです。それで、去年旅行会社と連携し韓日間で観光を主にして見学、視察、研修、出張、国際交流等ビジネスをサポートするエージェンシーを設立しました。
まだ、規模も小さいし実績も少ないですが、12 年間日本での経験を生かしてやっています。
歴史、政治的な問題で最近数年間、韓日関係は厳しい状況ですが、小さな努力が集まって大きい変化をさせるのを我々は目撃しました。
まずは民間関係からです。行動力です。
今年 1 月には日本の性暴力被害のサポートボランティア団体の依頼で韓国の「ナヌムの家」を訪問し、日本人女性のボランティア方の案内で見学し、慰安婦被害者のハルモニ達にお会いしました。帰りのバスで涙がでました。

両国はまだお互い知らない事が多いです。真こころで向き合えば「両国の春」はようやくやってくると思います。
ツアーの最後にいつもお客様にアナウンスします。「韓国では人との絆を大切にする言葉があります。袖だけ触れても良い縁です。」

佳作

私が感じた韓国

野崎ターラー〔大阪府〕

「ちょうどいい湯加減」

気がつくと、いつも身近に’韓国・朝鮮’があった。長屋に住んでいた頃、上の階の住人は、韓国人の植木職人で、よく焼肉をご馳走してくれた。学生時代、ボランティアの識字教室で何人もの‘アジメ’とよばれるおばあさんたちと出会った。在日の友人がいて、彼らが「もうすぐチェサ」というのを聞くたび、関係ない私までそわそわした気持ちになった。好きなアーティストは前衛表現をする、これまた在日の女性だったし、好きな詩人茨木のり子は韓国をとても好んでいた、、、

インド人の父を持つ私は、思春期以降、この国での自分の立ち位置がわからなくて悩んでいた。だから、身近な「外国」いや、「日本ではない誰か、何か」として、在日社会に惹きつけられていったのかもしれない。

日本で生まれ育ったのに、どこかしっくりこない自分。はみ出していることを否応なく感じさせる社会の空気感、、、日本文化は好きだし、日本人の友人ももちろんいる。でも、心の奥に、いつも何か物足りない気持ちがあった。それが何なのか、長い間わからなかったが、あるとき気がついた。それは、人の持つ「熱さ」と「激しさ」。穏やかさが持ち味の日本では、そっと排除されるこの特徴を、私は自分の内側に感じて無意識に蓋をしてきた。でもそれは、巻き爪のように心に食い込んできて、私を苦しめていたのだった。

そんな私が、一瞬でも息をつけたのが、在日の人や社会だった。人そのものの持つパワー、人同士で交わされるパワー、そのどちらも水彩画のような日本の日常では手に入らないもので、閉塞感の息継ぎを私は在日社会でしていたと、今、昔を振り返って感じている。

人の熱さ、激しさのるつぼのようなインドへは、子供時代から時々里帰りをしていた。私が慣れているのは日本での暮らしだが、かの地へ行くと、ジクソーパズルの抜け落ちた絵柄に、ピタッとあてはまる出来事やら習慣のピースがあちこちにあり、静かな興奮を味わう。一方で、人や社会のあまりのパワフルさ、激しさ、クセの強さに、やっぱり自分はここではやっていけないと、敗北感のような気持ちを味わうのだ。

ところで、一昨年、初めて韓国へ行く機会があった。空港に降り立ち、街に出てしばらくブラブラして、ふと思った。「この温度感は、合う」と。日本に比べると、韓国は相当’熱い’が、インドに比べると穏やかな社会。私にとってちょうどいい湯加減の国。湯船で手足を伸ばすように、心身がほどけたような気持ちになった。

ということで、今私は韓国語を学んでいる。韓国のことをもっと知りたいという気持ちと、身近にいる（ある）在日社会に、もう少し近づきたいと思うからだ。今後、私と韓国の関係がどうなるかわからないが、きっといい関係が築けると思っている。

佳作

私が感じた韓国

小松崎有美〔埼玉県〕

その日は主人の帰りが遅かった。事故か事件か、心配性の私はあと５分遅かったら警察に連絡するところだった。「すまん、すまん」午後 11 時、やっと新米主任が帰ってきた。主人は介護士として老人ホームで働いている。今年度から昇格し、職員と利用者のパイプ役を勤めている。超勤の理由は職場に入ってきたパート職員さんのことだった。この春からなんと韓国人の女性が入ってきたのだが、聞くところによると利用者の家族からクレームが主人宛に来たという。「どうもね、帰りたいって言い出したおばあちゃんを帰そうとしたみたいで」なるほど。「それだけじゃないんだよ。結構何でもやってしまうんだよね。利用者もまだ自分でできる力があると思うんだけど」おお、なるほど。確かに育児もそうだが、ついつい待たずに手を出し、口まで出してしまうことは私にもある。それより気になったのは最後に主人が「韓国人だからさ」と言ったことだ。この物言いに疑問を感じの、すぐさまインターネットで「韓国人、日本人、気質」で検索した。便利な世の中でその答えはものの数分で出た。「韓国人は白黒つけるタイプで、日本人はオブラートに包むタイプが多いかあ」私は首をかしげた。この私がまさにオブラートを剥がして自己主張するタイプだからである。それにしても離職率が高い介護現場に、言葉と文化の壁を越えて飛び込んでくる彼女に敬意の気持ちの方が強かった。翌日息子を連れて主人の職場に遊びに行くことにした。邪魔にならないようにスタッフルームから見守っていると例の職員さんが来た。まずい、何て挨拶をしたらいいんだ。私は慌てた。すると片言ではあるがこちらの目を見て挨拶をしてくれた。さらには椅子と麦茶まで用意してくれた。申し訳なくて「アリガトゴザイマス」と、こちらが片言になってしまった。この日主人から彼女に家族からのクレームの件を伝えたようだった。彼女は目を真っ赤にしていたという。良かれと思ってしたことが凶と出てしまった、その悲しみは痛いほどわかった。しかし、その日から彼女は物凄く努力をした。利用者の行動を待つ姿勢、上司に判断を委ねる様子が随所に見られるようになった。たった二ヶ月で彼女はマイナスをプラスに変えた。そんな様子を日々主人から伝え聞き、やはり「韓国人だから」はおかしいと改めて感じた。彼女はここに来て、言葉を学び、そしてコミュニケーションを学んだ。私はそんな彼女から、他人を思いやる心を学び、自分を変える勇気を学んだ。誰だって、いつだって、その時その場所が正念場。自分を変えるチャンスはあるのだと彼女を見ながら思った。働く外国人にとって、言葉や文化の壁はあっても、不利にはならない日本であって欲しいと、そういう日本をつくる一人でありたいと私は思う。

最優秀賞
タッカンマリ

鈴木優羽〔立教大学〕

今、世界は言うなればグルメ時代。グルーバル化により人間の三大欲求の一つ、“食欲”を世界に追い求めることが可能な時代になった。

今回のメインディッシュを食べに向かったのは東大門。タクシーの運転手によれば、このあたりには鍋料理専門店のタッカンマリ通りがあるらしい。

「タッカンマリ」とは「タッ＝鶏」「ハンマリ＝一羽」という韓国語で、直訳すると「鶏一羽」となる韓国鍋料理。名前が謎をさらに深めるばかりで、早く食べたくてウズウズする。店を決め、迷わず噂のタッカンマリを注文する。「おお、素朴ながらもダイナミックだ。」初見こそは一瞬食べるのを躊躇するかのような風貌であり、たじろいでしまう。思わず二度見すること間違いない。丸裸の鳥が、まるで風呂にでも浸かってる、そんな錯覚をする。鳥からは旨そうな湯気が上がり、いつ風呂から上がってもおかしくない。これを素早く解体していく。鳥の解体などいきなり素人がやるのは難しく、店の人がやってくれるのが常だ。迅速な手さばきで解体された鶏はネギ、ジャガイモと共に蓋をする。少ししてお店の人がジェスチャーでもう開けていいと教えてくれたので蓋をあける。旨そうだ。まずはスープから頂く。

「チャル モッケスンニダ」

口に入れたその瞬間、体が温まり、五感が冴え渡り、見える世界が変わる。そんな気分になった。鳥から立ちのぼる湯気がオーロラへの美しいゆらめきとなりそれらを目で感じた。何時間も煮込み、適温に保たれたスープのやさしいぬくもりは手のひらで堪能できる。歴史が生んだ何種類もの具材が織り成す濃厚な香りのハーモニーを鼻で頬ばる。どこまでも透明で透き通ったスープの上品な音色を耳で満喫する。そして、韓国建国以来から続くその味を先人たちの功績と意志を数多の笑顔が詰まった幸福の記憶を、口で舌で全身でたたえ、噛みしめ、味わった。美味すぎる、それが脳内でネオンのごとく煌々と光った。うむむ、癖がなく、それが癖になりそうで満腹中枢がドヴォルザークのイシュトバン・ケルテスを演奏しだしたかのようだ。鳥とネギとアクセントで入れたニラが手を取り合ってフォークダンスをしている。

まさしく美味だ。しばらくスープを飲み続けそれから鶏肉を頂く。レンゲから口に運ぶ。鶏肉もまた美味しい。適度な歯ごたえも残っていて、それがまたイイ。しかも骨までホロホロで、はずさなくても丸ごと食べられそう。小骨や肋骨はそのまんまムシャムシャ戴いた。

最後は残ったスープに麺を入れて食べるのが定番らしくそれを注文した。味はあっさりとした塩ラーメン。だがダシが一味も二味も深みのある味わいがした。タッカンマリは最後まで無駄がなくクセになりそうな味であった。

このようなまだ見ぬグルメが隠れているのが韓国である。
次は韓国のどこを食べよう。未知なる美味な韓国のグルメに人々はこれからも魅せられるばかりである、そう感じた今回の旅だった。

優秀賞

私が見た韓国

蓮池未侑〔岡山県立岡山操山高等学校〕

人生初の海外旅行が韓国でよかったと、私は今でも心からそう思っている。慣れない異国の地で私を救ってくれたたくさんの韓国人の優しさと温かさを、私は一生忘れないだろう。

中学３年の夏、日韓交流プログラムに参加した私は、念願だった韓国へ行けることになった。祖母に影響され韓国ドラマに魅せられて早数年、私はすっかり韓国が大好きになっていた。そんな私がついに韓国に行ける。期待に胸が高まった。もちろん、初めての海外旅行は不安だったが目的は日韓交流で、街に出る機会は少ない。そのため、旅行で困ることも少ないだろうと思っていた。

そう思っていた私は、初日から文化と言葉の壁にぶつかった。プログラムに参加していたほとんどが高校生で、年上の韓国人にうまく敬語で話せるかが不安だった。しかし、緊張しながらも韓国語で自己紹介をすると相手は少し驚いた様子で韓国語が上手なんだねと褒めてくれた。そこから私たちは次第に打ち解け、たくさん会話をした。相手の日本語は少し変なところもあったし、もちろん私の韓国語も完璧ではなかった。しかし、会話という人と人との繋がりの中では教科書のような「正しい言葉」というものは必要ない。必要なのは、互いを分かり合いたいと理解しようとする気持ちなのだと学んだ。

文化の壁はまだまだ私に人の温かさを教えてくれた。日本人のルームメイトと洗濯をしに行った時、私は困惑した。洗濯機のボタンの文字がすべてハングルなのだ。韓国に居るのだから当たり前である。とりあえず韓国人のルームメイトに電話をして助けを求め、待っている間にあれこれとボタンを押してみたりしていた。その時、二人の男性が近寄ってきて、洗濯の仕方が分からないのかと声を掛けてくれた。私たちがそうだと答えると、親切に使い方を教えてくれ、韓国語で理解できない私たちのために英語でも説明をしてくれた。それだけでなく、洗剤は持ってきているのか、無ければ僕達のを使うといいと言ってくれたり、洗濯機を使えるように硬貨の両替までしてくれ、その優しさに私はこれまでにない感動を覚えた。ひたすらに感謝の言葉を述べる私たちに、彼らはこういった。「日本の人がこうやって頑張って韓国語を勉強してくれているだけで韓国人としてはとても嬉しいことです。これからも韓国語の勉強を頑張ってください」と。それ以前の私には、日本に限らず海外の若者も人とあまり関わろうとしないという印象があった。しかし、この男性達の様な人もいるのだと知りとても嬉しく思うと同時に、そんな人達のいる韓国がさらに大好きになった。

世界にはいろんな人がいて、それぞれの価値観がある。だから、韓国が好きな人もいれば、その逆がいるのも当たり前である。しかし、私の見た韓国は、人に親切で思いやりと優しさに溢れた美しい国だった。たくさんの人に、旅行を通して韓国という国の魅力がもっと伝わることを願う。

優秀賞

華厳寺の旅

小松茂生〔神奈川県〕

華厳寺の石塔が見たかった。あらかた日本の石塔を見て歩いた末の、何としても実現したい旅であった。一人旅は自信がなかったが、娘が気遣ってついてきてくれるという。
飛行機を乗り継いで、光州空港に降り立ったのは十四時半頃、日差しは激しく、だいぶ熱気にあてられて弱気になっていた。心細さの極致を感じながら、ノンソンに宿をとる。観光地ではないから、なんとも言語に困る。明日一番で乗るバスの停留場も、立て札もなく、不安は増すばかりだった。
二日目は一転して雷雨である。いつやむとも知れぬ土砂降りの中をバスは高速道路を走り続けた。全行程の八割がたが高速道で、二時間も走ったろうか、万一このバスがつかまえられなければ、金に任せてタクシーを雇おうという了見がいかに甘かったか、背筋まで寒くなる。途中雷雨は強くなるばかりで、目的地到着頃には降りやんで、無事石塔群が見られるのだろうかと案じられた。

高速道を降りると、ひなびた街をいくつか過ぎ、到底バス道とは思えないあぜ道のようなところも通る。右折できずに左折して、やがて旋回してそれを果たすというようなきわどい運転まであった。
とうとう終点の華厳寺に就く。案内書で得た知識では、ここから山道を三十分歩いてのぼることになっていた。
われら二人のみの客がバスを降りると、雷雨が頂点に達していて、傘をさしても一、二分で骨の髄まで水浸しになる、そんな勢いであった。乗ってきたバスは何処へか去ってしまい、周囲に人影もなく、車もなく、家もなく、広々とした水たまりに、終点の小屋が建っているばかり。助けを求めることは一切できない。日本なら、救急の処置が何かあったであろう。私は死を予感した。途方に暮れて、午後の戻りのバスまで、五時間をここにじっとしていなければならないのだから。

ここで奇跡が起こった。

私は生涯この時のことを忘れないだろう。一台の作業車が近づき二人に乗れと合図する。何処へとか何故とかいう余裕はない。なんであろうと、屋根のある所に逃げ込みたい一心だった。
工事用の道具を満載した車は山道をひたすら走った。誰も一言も声を発しない。華厳寺山門と思しきあたりで降りろと合図がある。
高額の乗車賃を請求されても潔く払おう、と覚悟する。
財布を出し、紙幣を差し出すが、いらない、と手を振る。あっという間に車は消えていった。この旅の最大の収穫であった。人間は本来人種や性別の差別なく、性善であると胸に刻む。
雨は小やみになっていた。階段を上ると、左右に建造物が並び、雄大な古刹が霧の中から見え始め、東西に夢に見た五重層塔がどっしりと座していた。

佳作

私が韓国で学びたい理由

佐藤華〔仙台白百合学園高等学校〕

「韓国に旅行に行くことと、韓国に留学することは違う」

高校２年生のとき、両親や先生にこの言葉を何度も言われた。

小学２年生のころから k-pop に興味をもち、韓国語を勉強してきた私は中学生の時から韓国へ留学に行くと決めていた。私は韓国が大好きだから留学に行っても大丈夫、そう思っていた。

高２の３月。毎年恒例の母との韓国旅行。この旅行は私にとって特別だった。いつものように大音量で音楽が流れる賑やかな明洞や弘大で買い物するだけではなく、博物館や伝統ある建物に行って韓国の歴史や文化を知ったり、色々な場面で韓国語を使って自分の韓国語がどれくらい通じるのかを試してみたかったのだ。

いざ韓国に着くとその期待は裏切られた。明洞の観光客へのセールスに圧倒され、会話の速さについていけず、韓国語を話すことなど全く出来なかった。そしてすっかり自信を無くした。このままでは私に留学は出来ないのではないかと落ち込んでいた時、なんとなく入った路地裏の飲食店。私はこのままではだめだと勇気を出して韓国語で注文をした。すると、「韓国語上手だね。」と店員さんが褒めてくれた。私は「韓国語を勉強しているんです。」と答えた。私の韓国語が通じ、会話ができたとき、とても嬉しかった。私は店員さんの優しさに自信が持てるようになり、多くの現地の方々と交流した。店員さんの優しさが、私に韓国語で話しかける勇気をくれた。

狭い路地に衣服や屋台の食べ物が並び、向かいの店同士大きな声で話すおじさんとおばさんが印象的な、韓国で最も古い歴史を持つ南大門。トッポギを注文して私にも容赦なく韓国語で話すおじさんの冗談に自然と答える私や南山韓屋村で韓服の着方を独特ななまりで指摘し、韓服の歴史やチマとチョゴリの色の組み合わせについて語るおばあさんの言葉を聞き取る私に自分で驚いた。私はこの暖かくて、たくさんの会話が飛び交う韓国の雰囲気が大好きだ。

ハングル博物館に行ったとき、ハングルの歴史や文字の成り立ちなど、自分が今まで勉強してきた韓国語の根元を知った。しかし、今の未熟な私の韓国語の知識では全てを理解することはできなかった。私は留学をして今よりもっと韓国語が話せるようになった時、もう一度来ようと強く思うようになっていた。

高３になった今、私が「韓国に旅行に行くことと、韓国に留学することは違う。」と誰かに言われても、私は自信を持って、それでも私は大丈夫。留学に行く。と答えることができる。それは、この韓国旅行を通して、たくさんの韓国の方々と交流したからだ。気さくに話しかけてくれる屋台のおじさんやおばさん、韓国の暖かい雰囲気、私はここで学びたい。韓国の文化や歴史、韓国に住んでいなければ理解することのできない韓国語のニュアンス、細かい発音の違いを留学を通して学ぼうと思う。

佳作

「韓国」と「世界」と「僕」

静尚輝〔智辯学園高等学校〕

日本の近くに位置し、日本と昔から交流を続けてきた国「韓国」ですが、最近ニュースやSNSで韓国のことを批判する投稿やコメントをよく見るので、僕はあまり韓国に対して良いイメージを持っていませんでした。

高校一年の夏、韓国からの短期留学生が智辯学園にやってきました。僕は、少し不安がありましたが、その留学生たちのホストファミリーに立候補しました。わずか一週間の間でしたが、僕の韓国人に対するイメージは大きく変わっていきました。皆、日本の高校生と何一つ変わらない、普通の高校生でした。今でも、その留学生と遊んだり、話したりしたことをよく覚えています。その時から僕はとても韓国の様々なことに、関心を示すようになりました。そして今回、韓国への研修旅行の参加募集があったので、僕はこの旅行への参加を決意しました。

また海外へ行ったことが無かった僕は、パスポートの取得や、スーツケースに旅行の準備を詰めたりすることがとても新鮮でワクワクしていました。今回の旅行は、和歌山校、カレッジ校、奈良校の三校合同で行われるものであり、他の学校の生徒と上手くやっていけるかという不安もありました。そんな不安と旅行に対する高揚感が入り混じる中、韓国へ飛び立ちました。

韓国に着いてまず思ったことは、日本とそんなに変わる所はないということです。顔もほぼ同じ系統なので、あまり海外に来た感じがしませんでした。しかし、バスに乗ると標識や看板がすべてハングルで書かれており、韓国に来た実感が湧いてきました。旅程の前半は、歴史的な所や史跡を巡りました。仏像やお寺などがありましたが、どれもよく日本のもとに似ており、文化が似ていると聞いていたことを改めて実感し、また韓国に親近感が湧きました。

後半は、漢陽工業高校や、美林女子高校といった韓国の姉妹校の高校生たちとの交流が中心でした。漢陽高校の生徒は、昨年智辯学園を訪れていたので、一部知っている生徒もいました。そしてそれぞれの高校との交流会を楽しみました。

帰りの飛行機に乗った時は、帰りたくないという気持ちでいっぱいでした。そして、韓国に対して、嫌悪感や不安を抱いていた僕はもういませんでした。

人と人がつながることに、国籍や生まれた場所など関係ないと思いました。今まで自分が韓国が怖い国だと思っていたのは、流れてくる噂やニュースなどに左右され、よくその国のことを知ろうともせずに、同調していただけでした。しかし、そこから生まれる偏見が、世の中を悪くしているのも事実です。この偏見を少しでも無くしていくのが、今の世の中には必要だと思いました。この研修旅行は、このようなたくさんのことを考えさせられる旅行でした。

佳作

障がいと国境を越えて

松浦歩美〔筑波大学附属桐が丘特別支援学校〕

ソウル明洞の一角に、耳がご不自由で言葉がうまく話せないご夫妻が営まれているホットクの露店がある。いつも人が並んでいる人気店だ。ここにそのご夫妻との交流を綴りたいと思う。

６年前の夏休み、私が小学校６年生の時に初めて韓国を旅行し、その時行ったのがホットクの露店だった。注文しようと私が近づくと店主のご夫妻が驚いたような顔をした。無理もない、私は身体が不自由で車椅子に乗っているからだ。私はいつものことと気にもせず、2つ注文した。すると、すぐ食べる用に２つ、持ち帰り用に５つも手渡された。店主のおじさんが「どうぞ。自分も妻も耳が聞こえない。お互いファイティン！」という身振りをされた。奥さんの方を見ると優しく微笑んでいる。耳に障がいのあるご夫妻が身体に障がいのある私を励ましてくれたのだ。そんな経験はしたことがなかったため、感動して泣きながらホットクを食べた。その素朴で甘い味は未だに忘れられない。

それからは、ソウルに行くと必ずその露店に足を運んでいる。ホットクの味はもちろんだが、何よりご夫妻のお人柄が魅力的で会いたくなるからだ。お店替わりの小さなトラックでお二人は１つ約１００円のホットクを暑い日も寒い日もひたすら焼いて売っている。穏やかな中にもいくつもの困難を乗り越えてきたであろう芯の強さを感じる姿に、心を打たれる。障がいがあっても一生懸命に生きてきた人生のお手本というべき美しい姿なのだ。私が行けば、身振り手振りを使っていつも励ましてくれる。会話こそできないが障がいの種別と国境を越えた心が温くなる交流に、私は前を向いて生きる勇気をもらい、どれほど支えられたか分からない。その感謝を韓国語で伝えていたが、どれだけ伝わっているかに不安があった。お二人とも読唇はできるようだったが、ご夫婦間は手話で会話をされているからだ。ある時、確実に感謝の気持ちを伝えたいと思い、一大決心をしてハングルを覚えて手紙を書くことにした。実は、車いすだと習いに行くことが物理的に困難なため、韓国語の勉強は独学でしている。日常会話は、何年間もひたすら聞いて不自由がない程度に覚えることができたが、文字を覚えることは、脳性まひの後遺症で形を捉えることが苦手なため、何度もチャレンジしては挫折をくり返していた。だが、ご夫妻に喜んでいただきたい一心でなんとかハングルを覚え、その場で読んでもらえるようカードに感謝の気持ちを書き、こずかいを貯めて買ったプレゼントと共に渡した。ご夫妻共にとても喜んでくださり、一緒に写真を撮った。

韓国には、他にも私を励まし助けてくださった方々がたくさんいる。障がいがあると大変なことも多いが、だからこそ分かる韓国の方の心の温かさ、情の深さがある。そんな愛に、たくさん触れるうちに自分に障がいがあってよかったとさえ思えるようになった。かけがえのない交流ができる韓国旅行は、私に生きる力を与えてくれる。

佳作

合わせ鏡

徳山容子〔山梨県〕

地下の駐車場に滑り込んだベンツは、可憐な電飾で彩られたエレベーターホールの入口に横付けして停まった。英国紳士を思わせるダークな色のロングコートを身にまとったドアボーイたち。機敏な動作でドアを開け、うやうやしく私たちを出迎える。

「ここ、本当にスーパーですか」

驚きの言葉とため息が、同時に私の口から漏れた。好奇心があとをついてくる。

２泊３日の日程で、スーパーマーケット視察のため韓国を訪れた。ここはソウルの山の手、カンナム地区にある『ＳＳＧ』という名の超高級店。およそスーパーという格付けが似つかわしくない、超一流ホテルのような店だった。店内は柔らかい色合いの間接照明で上品に演出され、コーナーごとにお洒落なセレクトショップといった感じ。ワインの売場はひときわ暗く、商品だけにダウンライトが当てられている。真っ黒な熟成肉が並ぶショーケースの向こう側はオープンキッチンになっていて、肉をさばくスタッフの洒落た白衣がよく見える。並んだ水槽は夢心地にライトアップされ、鯛やタラバガニ、オマール海老、アワビなどが入れられている。

「大財閥『新世界グループ』のステイタス・シンボルといったところでしょうか」

案内役のジョニー・スゥ氏が、そう言った。

韓国は裕福な国だ。街なかの風景は「ここは日本か」と錯覚するほど私の熟知する国とよく似ている。けれど右側通行の目貫通りを走る車はどれも大きく、外国産の高級車が目につく。

一般的なグレードのスーパーも何軒か見て回ったが、どの店も活気に溢れ、カートに商品を山積みにした買い物客でごったがえしている。

「いつから日本は、あんなに疲弊してしまったのだろう」

ソウルのスーパーに私は日本の貧困を思い知らされた気がした。私が十代だった頃、日本にもこんな風景があった。お金を使うことを楽しみ、もっと良いものを、もっと美味しいものを、と探し求める意欲に満ちている。値引きシールを貼る従業員のあとを追いかけ回すような光景は、ここにはない。

そして気づくことがある。どの店に行っても、キムチや、その素となるアミやカキの塩辛が売場の中で大きな面積をとっていた。発酵食品が韓国の人々の食生活を支えている。それはきっと、今も昔も変わらない。

日本人はどうだろう。この半世紀ほどの間に、古来の食文化をないがしろにしてきてしまってはいないか。もしかしたら、衣食住のすべてに渡って、大事なことを怠ってきたのではないか。そのツケが日本を軸のない軟体動物のような弱い国にしてしまったのだろうか。

日本のあとを追うように、韓国も衰退していくと唱える専門家がいる。でも、民族の誇りを捨てない彼らが、そう簡単に弱っていくとは思えなかった。似ているようで、似ていない。時空の少しずれた近い場所で違うどこかを目指し歩み続ける日本と韓国。ふと私は、合わせ鏡の奥を覗き込んだときのような感覚に襲われた。

最優秀賞

친절한 나라 한국

井上京子〔長崎県立対馬高等学校〕

예전에 어머니에게 들었던 이야기가 있었다. 내가 아주 어렸을 때 우리집 근처에 한국인 가족이 살았었다. 그 집에는 나보다 5 살 위의 언니가 있었는데 나하고 자주 놀아주곤 했다고 한다. 그리고 그 댁 아주머니는 한국 요리도 자주 만들어서 동네 사람들에게 나눠 주곤 하셨다. 정말 친절한 가족이었다고 한다.
하지만 너무 어렸을 때 일이라서 나는 전혀 기억이 없었다. 뿐만 아니라 한국인을 만나고 교류해 본 적이 없었던 나는 한국인이 친절하다는 말이 잘 이해되지 않았다.
오히려 텔레비전이나 신문에서 한일 관계에 대한 정보를 들으면서 한국은 낯설고 무서운 나라라는 인상이 더 강했다. 그랬던 내가 지금은 고향을 떠나 나가사키현 쓰시마고등학교에서 한국어와 한국문화를 배우고 있다. 어떻게 이런 아이러니한 일이 일어났을까?

중학교 때 케이팝을 접한 나는 처음으로 한국에 대해 관심을 가지게 되었고 좋아하는 한국 가수의 노래와 인터뷰 내용을 이해하고 싶다는 생각을 하게 되었다. 케이팝에 빠진 나는 결국 한국어 전문과정이 있는 쓰시마고등학교에 지원을 했고 집을 떠나 기숙사 생활을 시작했다. 그리고 입학한 첫 해 여름방학 어학연수를 하기 위해 처음으로 한국 부산을 방문하게 되었다.
그 때 나는 처음으로 어머니께서 말씀하신 한국인의 친절을 이해할 수 있었다.
한국인의 친절함을 직접 겪게 되었던 것이다. 길을 몰라 두리번거리면 주변 사람들이 목적지까지 안내해 주었고 몸 상태가 나쁠 때에는 선생님을 비롯한 모든 스태프분들이 걱정을 해 주셨다. 지하철 역 계단을 내려갈 때는 무거운 가방을 대신 들어준 분도 있었다. 버스나 기차에서 친구들과 함께 앉을 수 있도록 자리도 양보해 주셨다.
홈스테이를 했을 때는 나를 진짜 가족처럼 맞이해 주셨다.
나는 한국인의 친절함에 너무 놀랐다. 일본인은 친절한 마음이 있어도 적극적으로 나서지 않는데 한국인들은 주저하지 않고 외국인인 나를 적극적으로 도와 주었다. 만나는 사람들 모두가 마치 친척같았다. 그리고 그런 친절한 도움을 받은 나는 낯선 한국에서도 힘을 낼 수 있었다. 어머니 말은 진짜였다.

늦었지만 그 시절의 한국인 가족을 다시 만나보고 싶다는 생각이 들었다. 그러면 한국어로 감사의 인사도 전하고 내 마음을 담은 일본 요리도 만들어 줄 수 있을텐데.
그리고 앞으로 만나게 될 또 다른 한국인과의 커뮤니케이션을 위해서 한국어 공부도 더 열심히 하고 한국의 문화와 역사에 대해서도 이해를 넓히고 싶다.

優秀賞

내가 느낀 한국

福田涼乃〔関東国際高等学校〕

올해 봄에 한국 유학을 갔을 때 내가 느낀 한국은 사람들이 솔직하고 기가 세고 친절하다는 것이었다. 물론 사람마다 다른 점은 있지만, 내가 아는 한국 친구들은 그런 사람이 많다고 느꼈다. 한국 유학에서는 한국 사람과 같이 이야기를 하고 교류를 할 기회가 많이 있었다. 한국의 고등학생들, 한국어를 가르쳐주신 선생님들, 쇼핑을 했을 때, 밥을 먹으면서 이야기를 했던 가게의 사람들, 이런 사람들과 이야기를 하면서 전체적으로 일본사람들과 많이 다르다고 느꼈다. 특히 고등학교에서 학생들과 교류했을 때 그 차이를 크게 느꼈다. 한국 친구들은 처음 만난 그 순간부터 스스럼없이 나에게 말을 걸어와서 친근하게 대해준다. 그래서 나도 똑같이 편하게 이야기할 수 있어서 좋았다. 서로가 이렇게 편하게 이야기를 하니까 재미있었고, 짧은 시간에 금방 친해질 수 있었다. 그리고 한국 학생들이 이야기하는 것을 듣고 있으면, 친구들이 정말 솔직하게 생각하고 있는 그대로를 말하고 있어서 그것도 정말 신기했다. 생각하는 것을 그대로 말하는 것을 보고 일본과는 좀 다르다고 느꼈다. 일본 사람처럼 주의해서 사람을 대하는 것도 중요하지만, 나는 한국 사람처럼 모든 것을 솔직하게 말할 수 있는 사이가 되면 좋겠다고 생각한다.

한국 사람은 일본 사람보다 자신의 생각을 주장할 수 있는 힘을 가지고 있는 사람이 많은 것 같았다. 한국의 고등학교에서 수업을 받았을 때 학생들이 적극적으로 손을 들고 발언을 해서 놀랐다. 수업의 분위기도 좋고 수업에 대한 학생들의 의욕을 느낄 수 있어서 인상적이었다.

그리고 한국 사람들이 따뜻하고 친절하다는 것도 느낄 수 있었다. 내가 홈스테이를 했을 때 홈스테이 가족이 나를 따뜻하게 대해주셔서 정말 고마웠다. 홈스테이 기간 중에 우연히 내 생일이 있었는데, 가족분들이 선물도 많이 주시고 케이크도 준비해 주셔서 정말 행복한 생일을 보냈다. 만난 지 얼마 되지도 않았는데, 이렇게 따뜻하게 나를 환영해 주셔서 너무나 기뻤던 것이 선명하게 기억에 남아있다. 한국 사람들이 무뚝뚝하고 냉정하다고 하는 사람들이 있는데, 그것은 한국 사람들을 잘 모르고서 하는 말이라고 생각한다. 앞으로 더 많은 사람들에게 한국의 참모습을 알려서 한국사람들이 따뜻하고 친절한 사람이라는 것을 많은 사람들이 알게 하고 싶다.

優秀賞

내가 느낀 한국

松平佳七子〔北海学園札幌高校〕

저는 한국에 갈 때마다 일본과 다른 상냥함을 느낍니다. 정치적으로 보면 별로 좋은 이미지는 없지만 실제로 한국 사람과 교류하거나 한국에 직접 접할 기회가 있으면 한국 사람의 상냥함을 느낄 수 있습니다.

예를 들어 다른 일로 바쁜 사람에게 길을 물어봤을 때 일본에서는 그냥 지나칠 뿐이지만 한국에서는 일부러 길을 아는 사람을 찾아서 대답해 주었습니다. 한국 사람 모두가 다 그런 친절한 사람이 아니지만, 확실히 공손하고 친절한 사람이 많은 것 같습니다. 또한 남에게는 냉정한 사람이 많지만 아는 사람이나 친구에게는 너무나 자상하고 어려울 때는 정말 친절하게 도와 줍니다. 한국은 이웃 나라라서 일본과 큰 차이가 없다고 생각하고 있었지만 사고방식이나 성격, 거리의 모습 등 일본과 많은 차이가 있다는 것을 알게 되었습니다.

한국 사람은 하고 싶은 말을 솔직하게 말하고 자주 싸운다는 이미지가 있습니다. 또한 희노애락이 뚜렷하고 전반적으로 일본 사람보다 성격이 밝습니다. 남의 시선에 신경을 쓰는 것보다 자신의 즐거움을 우선시하는 사람이 많은 것 같습니다. 한국의 가게는 일본의 가게보다 늦은 시간까지 영업하고 있고 거리에 손님들도 많습니다. 일본과 달리 한국에서는 지진이 별로 없기 때문에 고층 아파트 단지가 많습니다. 또한 일본보다 길에 쓰레기가 많이 버려져 있는 것도 큰 차이입니다. 음식점에서는 일본보다 흡연자에게 엄격하니까 밖에서 담배를 피우는 사람이 많고 길에 담배 꽁초를 버리는 사람이 많은 것 같습니다.

일본이나 한국이나 장단점이 있습니다. 진심으로 도와주고 긍정적으로 말해 주는 마음, 남의 시선에 신경을 안 쓰고 하고 싶은 말을 하는 성격, 별로 한국을 좋아하지 않는 사람이 보면 '시끄럽다', '이기적이다' 라고 말할지도 모르지만 실제로 한국 사람과 접해 보면 그 밝은 성격이나 착한 마음으로부터 힘을 얻을 때도 있을 것입니다. "가깝고도 먼나라" 라고도 하지만 이말에는 긍정적인 뜻과 부정적인 뜻이 함께 포함되고 있다고 생각합니다. 그러나 제가 보고 느낀 한국 사람은 대부분 착하고 밝고 자유분방하게 사는 좋은 사람들이었습니다. 실제로 한 번 접하고 느껴보면 알게 될 그 매력이 한국의 매력이라고 생각합니다.

佳作

한국 친구와 나누고 싶은 이야기

和氣菜摘〔関東国際高等学校〕

최근 한국에 대한 일본 청소년들의 관심이 많아지고 있다. 거리에서는 한국 아이돌들의 광고나 노래가 넘쳐나고 매일매일 일본의 어디선가에서는 한국 가수의 콘서트가 개최되고 있다. 나도 한국에 대해 관심이 많아서 한국어를 배울 수 있는 고등학교에 입학했다. 우리 학교는 한국어 외에도 다양한 언어를 배울 수 있어 중국어나 인도네시아어를 배우는 친구도 있다. 그런 한국어가 아닌 다른 언어를 배우고 있는 친구들도 한국에 대해서 관심이 많다. 한국어를 독학으로 공부하거나 우리 한국어코스에 많은 질문을 하는 친구도 있다. 이렇게 내 주위에도 느낄 수 있을 만큼 한국은 인기가 많다. 내가 한국에 유학했을 때 교류를 하러 고등학교에 가서 사실 한국 학생들도 마찬가지로 일본에 관심이 많은 것 같다고 느꼈다. 학생들은 우리 일본 학생들에 관심이 매우 많은 것 같았다. 교류한 학생들과 같이 학교 안을 걷고 있으면 다른 학생들이 많이 우리에게 말을 걸었다. 일본어로 인사를 해주거나 손을 흔들어줬다. 그것에 인사나 손을 흔들어 답을 했더니 내가 연예인인 줄 아는 걸까 하고 착각할 만큼 학생들이 환호성을 질렀다.

우리 일본과 한국은 제일 가깝고 청소년들을 중심으로 서로 관심이 많지만 아직 서로 정말 친한 나라가 아닌 것 같다. 역사적 정치적 문제나 오해가 있다. 청소년들은 그런 역사적인 문제가 생긴 시대의 경험이 없고 정치적인 것도 아직 잘 모르기 때문에 그런 것들은 생각하지 않고 서로의 문화에 관심이 있다고 생각한다. 하지만 유학 중에 홈스테이를 했을 때 나를 집에 초대해주신 가족 분들과 만난 날에 선생님께 정치적인 이야기나 서로 나라의 관계에 대한 이야기는 조심해 달라는 주의를 받았다. 그 때 우리 일본 사람과 한국 사람이 같이 친하게 되기 위해서는 그런 화제에는 조시해야 한다는 것을 알게 됐다. 솔직히 우리에게 나누면 곤란한 화제가 있다는 것은 정말 슬프다고 생각했다. 그 때부터 나는 언젠가 일본과 한국 사이에 그런 이야기가 없어지면 좋겠다고 계속 생각하고 있다. 제일 가까운 나라는 사이가 안 좋다는 말을 자주 듣지만 일본과 한국은 제일 가까워도 제일 친한 나라가 될 수 있으면 좋겠다. 나는 그 일에 힘이 될 수 있게, 두 나라의 가교 역할을 할 수 있게 열심히 노력하고 싶다. 더 많이 한국어 공부를 하고 두 나라의 문화나 역사를 이해하고 정진하고 싶다. 나는 진심으로 우리가 어른이 됐을 때 한국과 일본이 지금보다 조금이라도 더 좋은 관계가 되어있기를 바란다.

佳作

내가 느낀 한국

儀間麻梨哉〔長崎県立対馬高等学校〕

여러분은 한국에 대해서 어떤 감정을 가지고 있습니까? 저는 한국을 너무 좋아합니다.

제가 한국에 대해 관심을 가진 계기는 K-pop 과 드라마와의 만남이었습니다. 우연히 친구에게서 빌린 DVD 를 보고 한국 가수들의 박력있는 노래와 댄스, 통역도 없이 당당히 일본어로 자기 소개를 하는 모습에 압도당했습니다. 그리고 한국 가수들은 여러 방면에서 많은 노력을 한다는 점을 느꼈습니다.

한국 드라마는 할머니의 영향으로 보기 시작했습니다. 처음에는 그냥 좋아하는 가수가 나온다는 이유만으로 봤지만 그 드라마의 마지막회가 끝나자 다른 드라마도 보고 싶다는 생각이 들었고 그 이후 사극부터 현대극까지 여러 종류의 드라마에 빠지게 되었습니다.

그러다 중학생 때 친구들과 같이 한국인 교류회에 참석하게 되었습니다. 한국 요리를 먹고 게임도 하고 서로의 나라에 대해 많은 이야기도 나눌 수 있었습니다. 저는 이 교류회를 통해서 한국 대중문화뿐만 아니라 한국이라는 나라 자체가 좋아졌습니다.

처음에는 뉴스나 SNS 에서 보고 들었던 한일 문제, 반일・반한 감정, 정치・역사 문제때문에 불안감이 있었지만 실제로 교류회에 가 보니 그런 감정 없이 모두가 즐겁게 교류를 하고 있었습니다. 일본을 좋아하고 일본에 대해 많은 것을 알고 싶다고 하는 한국인도 있어서 처음 가졌던 불안감은 점점 사라졌습니다. 그리고 한국어를 공부해서 한국의 문화도 더 알고 싶고 한국어로 자유롭게 이야기도 하고 싶다는 생각이 들었습니다. 그래서 저는 한국어를 본격적으로 배우기 위해 먼 오키나와에서 나가사키현 쓰시마고등학교까지 유학을 왔습니다. 쓰시마는 일본에서 가장 한국과 가까운 섬으로 한국 관광객이 연간 30 만 명을 넘을 정도입니다. 학교에서 열심히 한국어를 공부한 결과 이제는 한국 사람들에게 한국어로 길도 알려 주고 서로 대화도 하곤 합니다. 한국어를 배우고 있다고 하면 많은 한국인들이 반가워하면서 저를 응원해 주십니다. 제가 배운 한국어로 외국에서 곤란해 하는 사람들을 도와 주고 응원까지 받을 수 있어서 무척 기뻤습니다.

올해 고 3 인 저에게는 멋진 꿈이 있습니다. 어학 실력을 살려서 한국 공항에서 그라운드 스태프로 일하는 것입니다. 공항은 많은 사람들이 출입하는 곳으로 많은 사람들과 만나 이야기를 나눌 수 있습니다. 한국을 여행하는 외국 분들이 조금이라도 충실한 여행을 하실 수 있도록 도움을 드리고 싶습니다. 제 꿈을 이룰 수 있도록 더욱 열심히 공부하겠습니다.

佳作

내가 생각하는 한일 교류

橋本桜〔桐蔭学園高等学校〕

주몽. 나의 한일 교류의 시작.
10 살 때, 어머니와 함께 본 한국 역사 드라마「주몽」. 이를 통해 한반도의 역사에 흥미를 가지게 되었고, 한국과 일본의 역사의 관계, 교류의 역사를 발견하는 것이 즐거워져서 어느새 많은 것들을 받아드리게 되었다.

최근에는 역사뿐만 아니라 K-pop 이나 한국의 청소년문화, 한국어에도 흥미가 있다.
한국어는 독학으로 공부를 시작해서, 작년에 한국어 시험을 봤다. 어학실력을 시험하기 위해서, 지난 여름에는 한국으로 여행도 갔다. 모두 스스로 여행 계획을 세워, 서울에서는 지하철을 타고, 가고 싶었던 대학가와 역사적 건물에도 방문했다. 그리고 방문한 가게에서는 절대로 일본어로 말하지 않기로 다짐하고, 한국어로 대화했다.

귀국 후에는 커뮤니티 앱에서, 한국의 사람들과 이야기하고 있다. 거기서 만난 1 살 많은 한국인 언니는, 나와 같은 BTS 팬이어서 더욱 친해질 수 있었다. 학교와 취미의 이야기를 할 뿐만 아니라, 여러 번 서로 선물을 주고받기도 했다. 외국인 친구와 이렇게 친해질 수 있을 거라고는 생각하지 못했는데, 언니도 편지에서 BTS 가 만들어준 인연을, 앞으로도 소중히 하고 싶다고 말해 줘서 너무 기뻤다.

이렇게, 나는 매일 한일 교류를 하고 있기 때문에 나에게 있어서 한국은 매우 가까운 존재이다. 그러나 뉴스에 방송되는 것처럼 국가로서의 한일의 거리는 아직 멀다. 양국의 거리를 줄이기 위해서 필요한 것은, 역사 인식의 차이에 대해 본심을 털어놓고 서로 이야기하는 것이라고 생각한다.
내가 예전에 커뮤니티 앱에서 한국과 일본의 정치의 이야기를 했을 때, 바로 많은 답이 돌아왔었다. 그 만큼 모두, 이 화제에 대해 민감하다고 생각한다. 이번에 언니가 일본에 오게 되면, 한국의 고교생의 역사 인식에 대해서도 솔직하게 의견교환을 해 보고 싶다. 하지만 솔직히 불안하기도 하다. 나에게 있어서 한국 사람과 역사 인식에 대해 이야기하는 것은 처음이고, 그 주제의 이야기를 꺼내면 기분을 상하게 할지도 모르기 때문이다. 그러나 나와 언니가 이야기하듯이, 모든 장소에서, 모든 사람들이 서로 경의를 가지고 이야기를 하면, 반드시 언젠가 서로간의 이해가 진행되는 것은 아닐까라고 나는 희망을 가지고 있다.

그러므로 장래, 한일 외교의 역할을 담당하기 위해서 나는 역사를 깊게 배워, 진정한 한일 교류가 실현될 수 있도록 노력하고 싶다.

佳作

내가 생각하는 한일교류

荻久保花音〔エムズ英会話〕

나는 어릴 때부터 좋아하는 것이 변하지 않았다.
나는 K-pop 을 좋아한다. 초등학교 때부터 좋아했다.
자기 소개 할 때도 그 말을 항상 했었다.
정치적인 문제도 있고, 한국에 대해 그다지 좋은 인상을 가지고 있지 않아서인지 K-pop 을 좋아한다고 해도 나에게 관심을 가져주는 친구는 없었다.
나는 어쩔 수 없다고 생각하지만, 정치적 문제로 한국 인상이 결정되어버리는 것이 싫었고 슬펐다.
하지만 정치 문제는 우리의 힘으로는 해결할 수 없다. 그렇지만 음악으로 한다면 좋은 인상을 줄 수 있지 않을까?
나는 K-pop 을 계기로 한국을 좋아하게 되었다.
그래서 이런 생각을 가지고 있다.
최근에는 K-pop 그룹 "TWICE" 가 대유행이고 중고생을 중심으로 좋은 영향을 주고 있다.
우리 학교 친구들도 "TWICE ' 를 계기로 한국을 좋아하게 된 친구가 많다.
" 한국어로 내 이름 어떻게 쓰는거야?"
" 한국의 패션은 멋지고 귀엽고 좋아! "
나에게 말을 걸어주는 친구가 늘었다.
지금 학교 점심시간 방송에서 K-pop 음악이 자주 흐르게 된 것은 놀랍다.
앞으로도 K-pop 를 통해 많은 사람들이 한국에 좋은 인상을 가져 주었으면 좋겠다.
트위터에서는
" K-pop 을 좋아하게 되면서 한국의 대한 인상이 완전히 바뀌었다. "
" K-pop 을 좋아하고 나서 인생이 바뀌었다 "
라고하는 사람까지도 있다. 인생이 바뀌었다는 기분은 잘 안다.
일본이라는 좁은 시각에서 한국이라는 나라까지 시야를 넓힐 수 있었던 것이다.
즉, 자신 안에 있는 세계 범위를 K-pop 을 통해 넓힐 수 있었던 것이다.
나는 한국어를 배우기 시작한지 1 년반이 된다.
열심히 공부를 하고 한글검정시험 4 급을 취득했다. 지금은 좋아하는 K-pop 노래도 조금씩 의미를 알게 되었다. 알게 되면 너무 재미있다. 그리고 더 깊이 알고 싶어진다. 한국에 관심을 갖게 되고 그 문화를 알고 싶어지는 것이다.
한국친구가 생겼다. SNS 를 통해 연락을 하게 되고, 펜팔을 시작하게 되었다. 친구는 나와 같은 K-pop 을 좋아하기 때문에 정보를 공유 할 수 있는 것이 무척 즐겁다.
나는 나중에 한국에 유학가고 싶다. 그 친구를 만나러 가고 싶다. 그리고 한국어를 습득하고, 친구를 만들고, 한일교류의 폭을 넓혀 가고 싶다.

이와 같이 K-pop 을 통해 한일 교류를 만들어 낼 수 있을 것이다.

最優秀賞

내가 생각하는 한일교류

山極尊子〔埼玉県〕

좋아하는 선생님께.

선생님, 저는 어머니가 두 분 계신다고 생각하고 있습니다. 한 분은 친어머니, 그리고 다른 한 분은 선생님 바로 당신입니다.

10 년전. 한국에서 일하게 되었고 좌우도 몰랐던 저는 매일 매일이 불안한 하루였습니다. 시간이 흘러 점차 한국문화를 익숙해지기 시작했을 즈음 이번에는 외국인이라는 외부의 선입관념 때문에 저는 지금까지 느껴본 적이 없던 깊은 소외감과 고독감에 빠지게 되었습니다.

"당신은 일본인이라 모를 수 있겠네요" 라는 말을 들을 때마다 너무 마음이 아프고 슬펐습니다. 그 때 마음도 달래고 음악도 배워볼 겸 찾다가 발견한 것이 바로 선생님의 "가야금 교실" 이었습니다.

어느 날 저는 뜻대로 모든 게 잘 되지 않아 선생님 앞에서 갑자기 울음을 터트려 버렸지요. 그때 선생님은 아무 말없이 저의 등을 가만히 쓰다듬어 주셨습니다. 저는 울면서도 선생님께 죄송스럽다고 생각했습니다. 왜냐하면 선생님과 저는 나이가 곱절이나 차이가 나고, 선생님은 외국인과 접촉한 적이 없다고 말씀하셨던 만큼 분명 당황해하고 계실 것이라고 생각했기 때문입니다.

그러나 선생님은 제가 울었던 이유를 끝까지 듣고서는 "외국에서 혼자 사느라 힘들었을 텐데 정말 잘 참았구나" 하시면서 품에 안아 주셨습니다.

저는 선생님이 제 입장이 되어 제 말을 경청해 주시는 마음을 느낄 수 있었기에 정말 기뻤습니다.

선생님은 제가 임신을 계기로 한국을 떠나는 날까지 친어머니처럼 저를 귀여워해 주셨어요. 가야금 수업 전에는 "매운 음식을 먹기 힘들 테니까" 하시면서 저에게 맵지 않은 음식을 만들어 주시고 "태교에는 음악이 제일이야" 라면서 멋진 가야금 가락을 태아에게 들려주시곤 했습니다.

저는 선생님 같은 분이야말로 앞으로 한일 교류에 꼭 필요한 분이라고 생각합니다."개개인을 존중하는 마음" 그러한 기반이 있을 때에 비로소 나라를 뛰어넘어 교류가 가능하다고 생각합니다.

정보가 넘쳐나고 한일 간의 정보도 서로 뒤얽혀 국가 간의 선입관에 사로잡혀 있는 현대. "나라" 라는 개념을 지워버리고 사람 한 사람을 존중해주는 행위는 쉬울 것 같으면서도 어려울지 모릅니다. 하지만 저는 선생님처럼 되고 싶습니다. 그리고 일본에서 한국 사람을 만나게 된다면 상대를 배려해주는 교류를 하고 싶습니다. 그것이 선생님이 가르쳐주신 진정한 교류라고 생각하기 때문입니다.

선생님, 엄마와 딸을 데리고 한국으로 뵈러 가는 날이 지금부터 기다려집니다.

그 때까지 부디 건강하세요.

韓日交流 作文 コンテスト

優秀賞

내가 느낀 한국

中山由紀子〔北海道〕

초등학교 때 친한 친구였던 유미가 어느 날 기쁜 듯이 말했다.
“우리 집에 새 엄마가 오셨어.”
“진짜?” 친구들이 다 놀랐다. 유미네 집에선 어머니가 이미 돌아가시고 외딸인 유미는 아버지랑 둘이서 살고 있었다. 내가 어떤 분이냐고 물어봤더니 유미가 자랑스럽게 말했다. “그건…사실은 일본 사람이 아니야. 외국 사람이거든.” 뭐? 외국인이라니…! 나는 태어나서 한번도 외국인을 직접 본 적이 없었다. 그래서 친구들이랑 같이 유미네 집에 놀러 갔다.

인사하기 전에 우리는 일단 문 틈으로 방 안의 상황을 살폈다. 외국 사람이라고 들었는데 거기엔 우리 어머니와 외모가 비슷한 아줌마가 보였다. 아줌마는 한쪽 무릎을 세우고 앉아 있었고 나는 그 모습이 좀 무서워서 겁이 났다. 우리가 입구에서 머뭇머뭇거리고 있으니까 아줌마가 우리를 알아차리고 다가왔다. “얘들아, 어서 와. 과자라도 먹어라.” 아줌마 말투가 조금 우리와 다르지만 좋은 사람 같아서 안심했다. 아줌마는 한국에서 왔다고 하시고 우리가 한국을 모른다고 하니까 지도를 가리키면서 알려주셨다. 그리고 붓으로 글자를 써서 우리에게 보여주셨다. 유미가 말했다. “이게 뭔지 알아? 한국 글자야. 한글이라고 하는 거야.” 나는 이 신기한 글자 모양에 눈이 끌렸다. 그 때가 아마 나와 한국어의 첫 만남이었다.

그 날부터 우리는 유미네 집에 자주 갔다. 아줌마는 언제나 우리를 환영해주셨다. 과자나 과일이나 때로는 밥까지 챙겨주시고 “다 같이 먹자.” 라고 하셨다. 하루는 수업이 끝난 후 친구끼리 가게에서 아이스크림을 사먹기로 했다. 그런데 유미가 집에 아이스크림이 있으니까 자기는 사 먹지 않겠다고 했다. 그래서 우리끼리만 먼저 먹고 유미는 집에 도착한 후에 냉장고에서 아이스크림을 꺼내서 혼자서 먹었다. 그 때 아줌마가 집에 돌아오셨다. 아줌마는 혼자서 아이스크림을 먹는 딸 모습을 보고 야단을 치셨다. 음식은 언제나 다 같이 나눠서 먹어야 한다. 혼자서 먹으면 그건 ‘정’이 없는 거란다고 하셨다. 이 얘기를 듣고 아까 유미만 빼고 우리끼리 아이스크림을 먹은 게 생각나서 나는 아주 부끄러워졌다.

지금 이렇게 한국어를 공부하면서 한국에 대해 많은 것을 알게 되었다. 그 때 우리가 봤던 아줌마의 행동 하나하나가 한국인다운 것이라는 걸 알았고 그 중에서 가장 기억에 남는 것은 아줌마가 자주 말하셨던 ‘정’ 이란 것이다. 고향을 떠난 지 오래 되었는데 다음에 내려갈 땐 아줌마를 좀 찾아뵙고 내가 한국말로 인사하면 아줌마는 틀림없이 기뻐하실 것이다.

優秀賞

한국중독

尾崎悠子〔東京都〕

또, 한국에 가고 싶다. 한국의 공기를 마시고 싶다. 그런 생각이 들기 시작하면 곧바로 항공권을 검색한다. 이것은 내 안의 「한국 산소농도」가 떨어졌을 때 정기적으로 나타나는 금단현상과 같은 것이다.

한국의 어디가 좋냐고 묻는다면 나는「공기」라고 대답할 것이다. 그것은 한국이 가진 분위기, 세계관이라는「공기」의 의미도 있지만 나는 더 단순하게 한국의 공기 O2 를 좋아한다.

비행기에서 내린 순간 우선 힘껏 심호흡하고 내 몸 구석구석까지 한국의 공기를 전달하다. '또 이 공기를 마시게 됐구나.' 그것만으로 가슴이 벅차 온다. 명동, 동대문과 단골 식당, 단골 찜질방. 30 번 이상 한국여행을 한 나의 목적지는 매번 똑같지만 나는 여러 관광지를 가고 싶은 것이 아니다. 무엇보다 한국의 공기를 마시고 싶었다.

일본에서의 하루하루는 정말 정신이 없다. 때때로 호흡을 하고 있는 것 조차 잊어버릴 정도로 스트레스의 연속이다.

하지만 한국에서의 나는 항상 천천히 천천히 심호흡을 한다. 덕분에 머리는 맑아지고 몸도 마음도 건강해진다. 만약 한국의 공기를 판매하고 있다면 잔업에 찌든 나는 틀림없이 살 것이다. 그것이 미세먼지투성이의 공기라 할지라도.

한국에서 돌아온 후 집에서 슈트케이스를 펼치면 한국 냄새가 난다. 아까까지 있던 한국이 벌써 그리워지기도 한다.

그리고 얼마의 시간이 지나면 나는 또다시 한국으로 향하고 싶어질 것이다. 그것은 내 몸 속에서 한국의 공기가 빠져나갔다는 증거니까.

한국이라는 나라는 '중독성' 이 있다. 자나 깨나 한국 생각을 하는 나는 아마도 이 중독에서 빠져나올 수 없을 것이다.

벌써 내 몸이 한국을 더 많이 원하는 걸 보면 아마도 다시 떠나고 싶은 병이 도진 듯하다. 그리고 나는 또다시 수첩을 노려보다 항공권 예약사이트의 버튼을 누르고 말 것이다. 그리운 한국 공기를 마시러.

佳作

말과 마음

大木未央〔千葉県〕

나는 대학에서 한국어를 전공해서 4 년간 한국어를 공부했다. 졸업한지 3 년이 지난 지금도 내 마음에 담아 있는 일이 있다. 이것은 대학생이었던 내가 한일 교류 프로그램에 참가했었을 때의 이야기이다. 그 프로그램은 한일 대학생들이 모인 교류프로그램이고 한국어나 일본어를 말하지 못하는 대학생들도 많이 참가했다. 그 중에서 한국어를 공부했었던 학생들은 통역의 역할을 맡았다. 한국어를 전공했던 나도 그들 중 하나였다. 나는 한국어를 모르는 대학생 대신에 말을 전하는 것으로 한일 교류에 조금이라도 도움이 될 수 있다는 기대감을 가지고 참가했다. 그렇지만 막상 한국 학생들과 회화하기 시작하면서 잘 모르는 단어나 듣기 어려운 부분이 많아서 점점 말할 수 없게 되고 말았다. 나 때문에 다른 학생들이 이야기를 하지 못할까 봐서 미안한 마음으로 가득했다. 하지만 내 생각이 틀렸다. 다른 학생들은 말의 의미를 이해하지 못하는데도 불구하고 얼굴에 웃음을 짓고 있었다. 오히려 언어를 모르는 그 상황을 즐기고 처음부터 아무 통역의 도움을 필요로 하지 않다. 그 광경을 보면서 한일 교류에 가장 중요한 것이 무엇인지 깨달았다.

나는 한국 사람과 이야기를 하고나 교류를 하고 싶어서 한국어를 전공했다. 상대방의 언어를 이해할 수 있다면 마음도 통할 수 있다고 생각했기 때문이 었다. 하지만 한국어를 공부하는 중에 한 소중한 마음을 잊고 말았다. 그 마음은 “상대방을 이해하려고 하는 마음과 자신의 마음을 통하려고 하는 마음” 이다. 나처럼 모르는 한국어가 있다고 해서 겁이나서 소극적으로 되면 교류할 수는 없다. 그 반대로 한국어를 완전히 이해할 수 있더라도 상대를 배려하지 않고 자신의 생각만 전하고 있으면 마음을 통하는 것은 불가능이다. 물론 언어를 공부하는 것은 상대를 이해하는 데 소중한 첫걸음이다. 그렇다고 해도 말을 통하는 것만 궁금하다면 마음을 통하는 것을 잃기 쉽다. 우리는 말로 소통을 하는 것이 아니라 마음으로 소통을 하는 것이다. 마음과 마음으로 이야기해서 초음에 교류이라고 말할 수 있다. 한국어를 공부하는 여러분, 한번 한국어를 다 잊고 당신의 있는 마음 그대로 이야기하면 어떨까요?

佳作

할머니와 나를 이어주는 것

宮本香央里〔東海大学〕

우리 할머니는 한국 사람이다. 할머니는 한국에 살고 계셔서 나는 할머니를 만난 적이 거의 없었다. 그래서 내가 할머니와 처음 대화를 나눈 것은 4 년전인데 그때는 간단한 인사밖에 나누지 못했다.

그 후 한국에 유학 갔을 때 할머니는 엄마 역할을 해주셨다. 매일 같이 아침, 점심, 저녁을 차려 주시고 나의 서투른 한국말에 귀를 기울여 주셨다. 그리고 할머니를 모시고 근처에 나들이를 가면 꼭 주변 사람들한테 "우리 손녀딸이에요." 라고 자랑을 하셨다.

그리고 아직도 생생히 기억 나는 일이 있다. 어느 날 집에서 텔레비전을 보고 있을 때였다. 갑자기 "지금 이렇게 둘이서 티비를 보고 있다는 게 너무 신기하고 너랑 한국말로 이야기할 수 있다는 게 너무 행복해." 라고 하시는 할머니의 눈에는 눈물이 고였다.

한국에는 "정 문화" 가 있다고 들었지만 한국어를 배우기 시작했을 때는 일본의 "情" 과 별 차이가 없다고 생각했었다. 하지만 한국어를 배우면서 한국과 한국인을 대하면 대할수록 한국의 "정" 과 일본의 "情" 의 차이를 알게 되는 것 같다. 할머니는 일주일에 두 번 노인돌봄서비스를 받고 계시는데 그 도우미 아주머니한테도 항상 가족과 마찬가지로 대하셨다. 원래는 아주머니가 할머니한테 식사를 차려 주는데 할머니는 아주머니가 고생한다고 가끔씩 식사를 차려서 같이 드셨다. 나한테 하듯이 아주머니한테도 정성껏 식사를 차려 주시는 할머니의 모습을 보니 한국 사람들은 가족뿐만 아니라 타인에게도 뭐든지 아낌 없이 준다는 것을 알았다. 이것이 사람들이 말하는 한국의 "정 문화" 라고 생각한다. 할머니와의 생활을 통해서 나는 그때까지 말로만 들었던 "정" 이 어떤 것인지 몸으로 느낄 수 있었다.

작년 여름에 유학이 끝나 일본에 돌아왔는데 할머니와 다시 떨어져 살다보니 왠지 마음이 허전했다. 또 한국 요리를 먹을 때마다 할머니가 만들어 주신 요리가 생각 나서 처음으로 할머니한테 한국말로 편지를 써봤다. 일본에서 있었던 일도 쓰고 그동안 한국에서 많이 챙겨 주신 것에 대해 감사의 마음을 담았다. 예전에는 편지는커녕 인사조차도 한국말로 잘 못했는데 지금은 할머니와 한국말로 의사소통이 가능해서 너무나도 행복하다.

어릴 때부터 떨어져 사는 데다가 가끔 만나도 손녀딸과 말이 안 통하는 할머니의 심정은 어땠을까? 하고 싶은 말이 정말 많으셨을텐데 전혀 이해 못하는 손녀딸. 나는 지금 한국말로 할머니와 사소한 이야기를 나눌 수 있다는 것이 뿌듯하다. 친구들과 이야기하는 것도 즐겁지만 할머니한테 손짓이나 표정이 아닌 말로, 내 생각과 마음을 전할 수 있게 된 것이 무엇보다도 기쁘다. 그래서 내 소중한 가족한테 느낀 한국의 "정 문화" 를 나도 다른 사람에게 알려주고 싶다. 나도 언젠가 다른 사람에게 "정" 이 많은 사람이 되고 싶다.

佳作

나의 한일교류 7 조

矢田智子〔高知県〕

나는 한국을 사랑해서 늘 한국에 대해서 생각하고 있다. 조금이라도 한일교류에 공헌하고 싶어서 사소한 일을 꼬박꼬박 실천하고 있다.

첫번째, 한국어를 공부하는 것이다. 12 년 간, 조금씩이지만 앞으로 나아가고 있다고 믿고 있다. 선생님은 한국에서 온 국제교류원으로 대대로 예쁘고 착하고 매력적인 분들이다. 선생님들한테서 한국어 지식뿐 만 아니라 한국의 아름다운 문화나 마음 등 많이 배웠다.

두번째, 한국드라마를 보는 것이다. 이제까지 250 작품 이상을 봤다. 남편이 "우리 집 텔레비전은 한국 드라마 밖에 비치지 않아"라고 말 할 정도다. 드라마를 보면 한국의 장점도 단점도 알 수 있다. 그리고 나는 한국을 알면 알수록 더 좋아하게 됐다.

세번째, 한국아이돌 팬이 되는 것이다. 콘서트에 가면 20 년은 젊어진다. 노래하면 한국어 공부도 할 수 있다. 점점 일본어 실력이 늘어가는 아이돌한테서 자극도 받는다.

네번째, 한국인과 친구가 되는 것이다. 한국어로 메시지를 주고 받는 것이 너무 즐겁다. 식사나 여행을 같이 하면 행복하다. 찬바람이 부는 밤 같이 걸었을 때 딸처럼 젊은 친구가 손을 잡아줬다. 나에게 한국인 딸이 생긴 느낌이었다.

다섯 번째, 한국여행도 아주 중요하다. 1 년에 한번은 가고 싶다. 못 가면 이듬해에는 두 번 가야 한다. 서울에 있는 자신을 상상하는 것만으로도 두근두근거린다. 서울은 제 2 의 고향 같다.

여섯 번째, 일본 친구에게 한국의 정보 발신! 친구한테는 적극적으로 한국 이야기를 한다. 한국어 교실 가입을 권유하기도 한다. 친구들도 나에게 여러가지 도움을 준다. 한국에 흥미를 가진 사람이나 가고 싶어하는 사람을 나에게 소개해줘서 덕분에 한국이라는 공통의 취미를 가진 일본인 친구도 많아졌다.

마지막, 일곱번째, 기회를 놓치지 않고 호스트패밀리가 되는 것이다. 이제까지 5 명을 맞이했다. 중학생과 대학생들이었는데 한일 양국의 배우 이야기들로 분위기가 고조됐다. 이번 여름에는 성인 여성 2 명을 맞이할 예정이다. 새로운 한국인 친구가 생길 것을 생각하니 설레인다.

한국사랑이 시작 된지 12 년이 지났다. 뭘해도 작심삼일로 끝났던 내가 오히려 깊어가고 있는 중이다. 덕분에 내 세계는 점점 넓어지고 생활에 활기가 생겼다. 서두에 한일교류의 공헌을 위해서라고 썼는데, 지금 이 글을 쓰면서 자신을 위해 교류를 하고 있는 것을 깨달았다. 나에게 있어 한국은 마치 보물상자 같고, 상기의 7 조는 하나하나의 보물이다.

佳作

내가 느낀 한국

刀祢友梨絵〔静岡県〕

한국에 유학했을 때 일본에서는 없는 인삿말을 찾았다. 친구와 헤어질 때에 하는 인삿말이다. 내가 다른 친구와 점심 약속을 해서 그 친구하고 헤어질 때 친구는 나에게 '맛있게 먹어' 라는 말을 하고 헤어졌다. 또 다른 친구와 약속이 있어 헤어질 때에는 '재미있게 놀고 와' 라는 말을 했다. 일본에서는 보통 헤어질 때에는 그냥 '바이바이' 라는 말을 쓰는 경우가 많다. 그 친구가 나와 헤어지고 다음에 무엇을 하는지도 궁금해 하지도 않고 오히려 묻는 것이 실례가 된다고 생각하는 경우가 많다. 일본인끼리 그렇게 하는 것은 편하기도 하고 섭섭하기도 한다. 한국인 친구는 알게 되고 얼마 되지 않는데도 오래 사귀던 친구같이 처음부터 친근하게 대해 주었다. 그래서 그런지 여러가지 묻고 그렇게 하는 것도 그렇게 부담스럽지 않고 따뜻하고 듣기 좋았다. 그리고 그냥 헤어지는 것보다 좋은 기분으로 헤어질 수 있는 것 같았다. 또 한국인은 헤어질 때 그냥 헤어지는 것보다 '조심히 가', '들어가 쉬어' 등 상대방을 생각하는 말을 일본보다 많이 하는 것 같다.

또 한국인은 '밥은 먹었어?' 라는 말을 자주 한다. 처음에는 왜 그렇게 밥을 먹는지 궁금해 할까 싶었다. 한국인 친구에게 묻자 인사 대신에 밥을 먹냐고 묻는 것은 밥을 잘 챙겨먹고 잘 있는지 확인하는 뜻도 담겨 있다고 한다.
한국에서 흔히 쓰는 그런 말들이 한국인의 포근한 정을 나타내고 있는 것 같다. 일본에서는 떨어져 사는 가족이라도 맨날 밥을 먹었냐고 확인하는 것은 없다.
그런 면은 행동에도 나타나고 있는 것 같다. 한국에서 거리를 걷고 있으면 여자끼리 팔짱을 끼고 걷는 모습을 많이 볼 수 있다. 그리고 10 대 아들과 손을 잡고 걷는 어머니 모습도 볼 수 있다. 일본에선 거의 볼 수 없는 광경이다. 일본 10 대 남성이면 쑥스러워서 함께 걷는 것조차 싫어할 사람이 많다.

일본은 시간을 걸고 신뢰관계를 만들어가는 것 같다. 그래서 흔히 쓰는 혼네와타테마에라는 말과 같이 생각을 직접적으로 말하지 못하거나 말을 망설이게 되는 경우도 많은 것 같다. 이것은 실례가 되지 않을까, 갑자기 그렇게 말하면 상대방이 불편하게 만든 것은 아닌가 걱정도 많이 한다. 그에 대해 한국인은 직접적이고 빨리 빨리 인간관계를 만들어 가는 것 같다.
한국에서 지낸 시간은 그렇게 길지는 않았지만 한국인 오래 사귀던 친구처럼 대해 주고 함께 지낸 시간보다 더 깊은 추억이 되었다. 일본인들도 그런 한국인 정을 조금 본받아봐도 되는 것이 아닐까 싶었다.

最優秀賞

부산불꽃축제

深井麻土香〔東京都〕

작년 10 월에 우리 어머니와 처음으로 부산불꽃축제를 찾아갔다. 소문은 많이 들어왔지만 한국에서 불꽃놀이를 보는 것을 상상하면 조금 어색한 기분이 들었다. 왜냐하면 불꽃놀이라고 하면 일본의 여름 풍경을 떠올리기 때문이다. 과연 부산의 가을 하늘에는 어떤 꽃들이 필지 궁금하면서 부산을 향했다.

밤까지는 부산 음식을 즐기기로 했다. 처음으로 부산을 다녀왔을 때 먹었던 돼지국밥의 맛이 계속 생각이 나서 유명한 집을 찾아갔다.

그나저나 나는 국에 밥을 넣어서 먹는 것을 별로 좋아하지 않는다. 예전에 먹었을 때도 밥만 따로 먹었다. 그런 나를 신경 쓰지도 않고 밥을 넣고 잘 드시는 우리 어머니. 그런 모습을 보고 나도 조심 조심 밥을 넣어봤다. 그랬더니 세상에! 밥과 소박한 짠 맛이 잘 어울려서 숟가락을 계속 대게 돼버렸다. 부드러운 맛이 아침의 속을 따뜻하게 해줬다.

해가 져서 바닷가에 갔더니 거기는 벌써 끝없이 사람들로 채워져 있었다. 도로에 앉아 술을 마시는 사람들의 열기로 가을의 쓸쓸한 밤도 뜨겁게 느껴졌다. 우리도 겨우 자리를 찾아 시작을 기다렸다. 설렘과 행복이 가득 찬 공간은 일본과 똑같았다.

불꽃축제가 시작되자 모든 눈길이 술에서 하늘로 옮겼다. 음악에 맞춰서 솟아 오르는 불꽃들이 너무나 예뻤다. 불꽃축제 전체가 하나의 이야기처럼 진행되고 그 이야기에 따라 음악도 바뀌고 불꽃들도 한없이 솟아 올랐다. 바닷가 앞에 보이는 다리에 문자들을 비추는 연출도 있어서 멀리서 보는 사람들도 이야기를 이해할 수 있게 되어 있었다.

우리 눈 앞에는 키가 큰 나무들이 나란히 서 있었기 때문에 그 사이사이에서 보고 있었다. 한 아저씨가 그 나무 앞에 가야 잘 볼 수 있겠다고 출입금지 줄을 잘라서 들어서버렸길래, 주변 사람들이 이것저것 떠들기 시작했다. 옆에 있던 아저씨는 우리가 일본 사람이라는 걸 알고, 카운트다운이 시작하자마자 일본어로 숫자를 세주셨다. 일본에서 불꽃놀이에 가면 같이 온 사람들끼리 즐기기 마련이지만 이렇게 조금 떠들썩한 불꽃놀이도 한국다운 운치가 있어서 좋았다.

결국 끝나고 바로 또 오자고 둘이서 이야기했었다. 돼지국밥도 부산불꽃축제도 제대로 맛봐야 그 매력을 느낄 수 있었다.

사람들이 막 집을 향했다. 가을의 시원한 바람이 사람들의 열기도 같이 데려갔다.

優秀賞

소설의 무대를 찾아가는 여행

福徳ひろみ〔東京都〕

책을 읽으면 책 속에 나온 곳에 가고 싶어진다."나의 문화유산답사기"를 읽고, 한국의 여기저기의 절을 벌써 20곳 이상 다녀왔다. 그렇게 해서 한국의 절을 더 좋아하게 되었다. 재미있게 읽은 소설의 무대는 특별히 가보고 싶어진다. 오정희"중국인 거리"를 읽고 나서 인천에, 김훈의"칼의 노래","남한산성"을 읽은 후에, 명량과 남한산성을 찾았다. 그 중에서도 가장 가보고 싶은 곳이 통영이었다.

통영을 무대로 한 박경리의 소설"김 약국의 딸들"을 읽었고, 주인공인 김약국의 5 자매와 그녀들을 둘러싼 등장인물들의 강렬한 삶에 놀랐고, 매료되었기 때문이다. 통영은 박경리의 고향이기도 하다. 이 곳에 꼭 가봐야 한다고 생각하고 있었다.

염원하던 통영에 간 것은 작년의 봄. 먼저 박경리 기념관을 찾았다. 1926 년생인 박경리는 일제 시대에 교육을 받았다. 그래서 처음에는 일본어로 원고를 썼다. 나중에 생각하는 것도 쓰는 것도 한국어로 바꾸어 가는데, 무척 고생했다고 한다. 전시되어 있었던 유창한 일본어 원고를 보고, 가슴이 메었다. 그 다음에 찾은 세병관은 삼도수군의 중심이었던 건물이었고, 이름의 유래도 흥미로웠다. 일제 시대에는 초등 학교로 사용되었고, 박경리도 여기서 배웠다고 한다. 17 세기에 건립된 한국에서 가장 규모가 큰 목조 건물의 하나이다. 지금도 신발을 벗고 마루에 올라갈 수 있다. 낡고 닳은 나무 마루를 걸으니 많은 전화를 뚫고 온 세월의 무게가 피부로 느껴졌다.

통영에서 2 박 한 후 하동으로 향했다. 여기에는 박경리의 소설"토지"를 원작으로 드라마를 만들었을 때 주인공의 집'최참판댁'이 세워졌다. 현재도 많은 역사 드라마 촬영장으로 쓰이고 있다. 넓게 펼쳐져 있는 풍요로운 땅, 작가도 이곳이 마음에 들었다고 하는데, 어떻게 해서 원작에 딱 맞는 장소를 찾아낼 수 있었던 것인가!"토지"는 일본에서도 전권 번역이 시작되어서, 나도 언젠가 한국어로 전 20 권을 읽고 싶다. 그래서 이 여행은 이를 위한 예습이 되었다.

마지막으로 원주에서 박경리 문학 공원을 찾았고,"나의 박경리답사기"를 마무리했다.

소설의 무대를 찾아보니, 희미했었던 장면이 영화의 영상을 보는 것처럼 뚜렷해지면서 등장인물이 생생하게 살아나게 되었다. 소설의 인상이 선명하게 될 뿐만 아니라, 그 장소에 대한 애착도 깊어지고, 자신만의 특별한 곳이 된다. 앞으로도 이런 여행을 계속 하고 싶다.

優秀賞

나의 13 번째 한국 여행

湯澤葉子〔東京都〕

‘성균관대학교에서 시험 보기’는 나의 13 번째 한국 여행의 목표였다. 한국에 유학가고 싶지만 형편이 안 돼서 하루만이라도 유학생 기분을 느끼려고 세운 목표였다. 50 대인 나에게는 컴퓨터로 원서를 내는 것조차 어려웠지만 시험 당일 수험생 명단에 내 이름을 발견했을 때 얼마나 행복했는지 모른다. 고생도 많았지만 즐거운 일이 더 많았다. 시험장에서는 수험생들과 많은 이야기를 나눴다. 내가 본 Topik1 은 한국분과 결혼한 외국 사람들이 많았다. 그런 사람들에게 한국 생활의 이야기를 듣는 것도 한국어 공부의 즐거움을 서로 말하는 것도 좋았다. 하지만 무엇보다도 역사가 긴 성균관대학교의 교실 안에서 내가 있고 시험을 보고 있다는 것이 꿈인 것 같았다. 이것만으로도 정말 행복했지만 더 인상적인 일이 생겼다.

시험이 끝난 후 나는 힘든 일을 해냈다는 큰 만족감을 안고 내려가는 엘리베이터를 탔다. 그런데 그 때 엘리베이터 안에는 수험생이 10 여명정도. 시험장에서 친해진 중국인이 나에게 물었다. “시험 어땠어? 일본에서는 공부 많이 했어?” 그래서 내가 대답했다. “열심히 공부했는데 나이 때문에 기억력이……” 중국인이 다시 물었다. “나이가 어떻게……?” “쉰 셋” 그러자 엘리베이터 안에 있던 사람들이 놀란 표정으로 나를 봤다. ‘하긴 Topik1 을 보기 위해서 한국까지 일부러 오는 50 대 여자는 나밖에 없겠지.’ 내가 그렇게 생각하고 있을 때 좀 전의 중국인이 갑자기 큰 소리로 나를 “언니!” 라고 불렀다. 그러자 다른 수험생들도 “언니” 라고 부르기 시작했다. 나는 좀 부끄러웠지만 왠지 연예인이 된 기분이었다. 한국어 학습자들에게 ‘언니, 오빠, 누나, 형’이라는 단어가 얼마나 매력적인지 한국 분들은 알고 계실까? 모든 학습자들은 한국인 친구가 많이 생겨서 자연스럽게 그렇게 부르거나 불리고 싶다는 소원을 가지고 있다. 나는 친한 한국 사람들도 있지만 그 사람들은 우리 딸과 비슷한 나이여서 나를 ‘언니’가 아니라 일본어로 ‘오카아상’이라고 부른다. 한국에서 ‘언니’라고 불렸던 것은 처음이여서 너무너무 행복했다. 그렇게 나의 13 번째 한국 여행은 잊을 수 없는 내 인생 최고의 여행이 되었다.

그런데 ‘언니’라고 불리는 것도 좋지만 다음에는 ‘누나’라고 불러 주는 친구가 생기면 좋겠다. 2018 년 한국 여행의 목표는 ‘꽃미남에게 누나라고 불리는 것’으로 결정! 나도 배우 손예진 씨처럼 예쁜 누나가 되고 싶다. ^^

佳作

손녀들과 나의 한국여행

山本佐智子〔高知県〕

'할머니, 우리들도 한국에 데리고 가 주세요 ~~~'
2015 년, 당시 저의 귀여운 손녀들은 고등학교 2 학년과 중학교 2 학년이었습니다. 제가 한국어를 배우고 있는 고치현 오치초국제교류협회에서 주최하는 한국여행에 참가하게 된 것을 안 손녀들은 간절히 말했습니다.

제가 처음 한국어를 배우기 시작했을 때, 초등학생과 중학생이던 손녀들도 마침 한국어에 흥미를 가지기 시작해서 케이팝을 들으며 독학으로 한국어를 공부하고 있었습니다. 처음에는 이름을 쓸 수 있다고 자랑하는 정도였는데 점점 노래를 부를 수 있게 되고, 드라마를 듣고 이해 할 수 있게 되자 한국에 가고 싶어진 모양이었습니다. 저는 손녀들의 소원을 들어주려고 상기의 한국여행을 다녀온 2 개월 후 두 손녀를 데리고 한국으로 다시 가게 되었습니다.

저는 조금 긴장했지만 제가 아는 모든 지식을 총동원해서 손녀들을 안내했습니다. 손녀들은 명동을 동경했다며 몇 바퀴인지 셀 수 없게 명동을 돌고, 젊은이들의 거리인 홍대에도 발길을 옮겼으며, 뿐만 아니라 인기가수의 사무소를 찾아가기도 했습니다. 젊은 사람이 가고 싶은 곳은 할머니인 저와는 많이 달랐지만, 새로운 한국의 매력이 신선했습니다.

손녀들을 완벽하게 안내하고 싶었는데 호텔을 찾아갈 때에도 헤매었고, 어느 매장을 가나 점원들의 일본어가 너무나 능숙해서 제 서투른 한국어를 거의 사용할 수 없었습니다. 여행에서 돌아온 후 손녀들에게 '할머니는 한국에 가서 일본어만 썼다' 라고 놀림을 받기도 했습니다. 조금은 안타깝네요. 손녀들은 한글을 읽을 수 있고 지나가는 사람들의 이야기를 이해할 수 있었던 경험으로 이제는 '한국에서 유학하고 싶어요' 라고 말합니다.
한국여행 이후, 더더욱 한국을 사랑하게 된 손녀들은 이제 대학생과 고등학생이 되었습니다. 저와의 여행 2 년 후, 두 손녀는 어머니를 데리고 한국에 여행을 가더군요. 그리고 다시 3 개월 후에는 손녀 둘이서만 다녀왔습니다. 우리 손녀들 대단하지요?

제가 손녀들과 공통의 화제로 이야기를 할 수 있는 것도, 손녀들과 함께 여행을 할 수 있었던 것도 모든 것이 다 한국어 덕분입니다. 저는 앞으로 더 열심히 공부해서, 다시 한번 손녀들과 함께 한국여행을 가려고 합니다. 그때는 손녀들 앞에서 완벽한 한국어를 보여주어 멋진 한국어 선배이자 자랑스런 할머니의 모습을 꼭 보여줄 수 있기를 기대합니다.

佳作

걸어서 제주도 한 바퀴 여행

田原彰人〔埼玉県〕

나에게는 원점이 있다. 그것은 항상 그곳에 있어 나를 분발시키는 원동력이다.

그 때의 나는 22 살이었고 제주도에서 1 년간의 교환유학을 하고 있었다. 유학의 목표를 한국어능력시험 6 급 합격으로 정하고 매일같이 학교 도서관에서 공부했다. 시험은 9 월말이었다. 하지만 처음으로 본 모의시험은 정말 엉망이었다. 시간이 없다. 그런 와중에 제정신이 아니었을까, 나는 어떤 계획이 떠올랐다.

제주도를 걸어서 한 바퀴 돌아보자.

그것은 단순한 기분 전환이었을지도 모르고, 더 큰 무언가가 있었는지 이제는 잘 기억나지 않는다. 어쨋든 나는 첫 발을 내디뎠다. 그것도 폭우 속에서.

쉬운 일이 아닐 거라고 한국 친구들은 말했지만 나는 동네에 쇼핑이라도 가는 듯한 가벼운 마음으로 출발했다. 하지만 거센 바람과 비를 온몸으로 맞으며 금세 절망에 빠졌다. 겨우겨우 약 35km 간 세화에 도착해 지인의 집에서 하룻 밤을 묵고 다음날은 아침 8 시 출발. 그러나 한계에 다다랐다. 무거운 발을 질질 끌며 25km 를 더 걸어 표선에 도착했지만 그 이상은 나아갈 수가 없었다. 결국 포기하고 말았다.

한국어능력시험까지 2 개월. 이대로 무언가를 쉽게 포기하면 버릇이 될 것 같았다. “걸어서 제주도를 한 바퀴 돈다면 시험도 합격할 것 같아. 그리고 시험에 합격한다면 그 다음 목표도 이룰 수 있을 것 같아” 그렇게 친구들에게 말하고 다시 마음을 다잡았다.

3 주 뒤. 나는 다시 출발선으로 돌아왔다.

그 때의 만남들은 평생 잊을 수 없을 것이다. 고작 냉면을 먹었을 뿐인데 서비스로 갈비를 주신 대정 아저씨. 열이 나자 약을 주신 남원 민박 이모. 더위로 지친 나에게 서비스로 팥빙수를 주신 세화 빵집 이모. 그리고 제주도의 자연. 생명력이 넘치는 녹색 땅과 검푸른 바다. 조용한 평야에서 풀을 뜯는 말들. 나는 그 속을 혼자 묵묵히 걸었다. 지치면 하늘을 향해 노래하며. 마치 꿈 속을 걷는 기분이었다. 그래 나는 꿈을 꾸고 있었다. 큰 가능성과 사명을 가진 동북아시아의 중심에서….

5 일째 밤 23 시. 나는 다시 출발지로 되돌아 왔다. 온전히 걷기만으로 제주도를 한바퀴 돌았던 것이다.

그 여행으로부터 13 년이나 지난 지금도 힘이 들 때면 제주도 여행이 떠오른다. 그 때의 기억은 아직도 내 인생과 연결되어 나를 움직인다. 그래, 그 여행은 아직 끝나지 않았을지도 모른다.

참, 시험결과가 어땠냐고요? 물론 합격했죠!

佳作

인생의 터닝포인트

棚澤弘美〔埼玉県〕

저는 50 대의 아줌마다.

6 년전에 지금은 돌아가신 아버지와 함께 처음으로 서울 여행을 했을 때 동그라미와 막대기로 짜여진 신기한 문자에 관심이 생겨 한국어 공부를 시작하고 한국에 관심을 가지게 되었다.

그러나 좀처럼 한국어는 늘지 않은 채 세월이 지나 올해 6 월 뜻밖의 사건이 생겼다.

올해 저는 한 한국 가수의 팬이 되어 팬카페에 가입했다. 그러나 그 게시판에 자기 소개를 올려야했다. 물론 닉네임을 사용해서 본명을 말할 필요는 없었다.

하지만 저는 망설였다. 일본인인 것을 정직하게 써야 할까?

망설임에는 이유가 있다. 내가 아는 일본인 중에는 "한국이 싫다" 고 하는 사람들도 있기 때문이다. 또 저는 한국과 일본은 서로에게 좋은 인상을 가지고 있지 않다고 느꼈다. 팬카페분들은 일본에 대해 부정적인 인상을 가지고 있지는 않을까?

고민 끝에 저는 "일본인" 인 것을 정직하게 썼다. 저는 한국을 좋아하기 때문이다. 그랬더니 따뜻한 환영의 메시지를 많이 받았다.

저는 너무 기뻐서 조만간 서울로 여행을 간다고 게시판에 썼다. 그러자 운영자님에게 "번개 할까요?" 라는 연락이 왔다. 저는 "팬카페 번개에 참가하지 않겠습니까?" 라는 의미라고 생각했지만 알고 보니 내 환영회라는 의미였다. 저는 놀랐다.

환영회 당일 인사동의 한 식당에 남녀 10 명 정도의 한국분들이 모여주셨다. 예전부터 알고 있는 사람처럼 느껴졌다. 저는 한국어는 잘 못하지만 통하고 있다! 서로 그 가수의 팬이라는 공통점이 있기 때문에 매니악한 이야기로 분위기가 무르익었다.

문득 아버지의 간병으로 바빴던 매일을 상기했다. 어머니가 돌아가신 후 늙은 아버지는 간병 시설에 들어갔다. 저는 평일은 회사에 가고 주말에는 아버지를 모시고 와서 집에서 간병했다. 여행을 할 여유 따위 없었다. 하지만 한국어 공부만은 계속했다. 언젠가 도움이 될 날이 올 것이라고 믿었기 때문이다.

아버지가 돌아가신지 1 년 4 개월. 저는 펜카페의 분들과 함께 한국어로 노래 부르고 웃고 서로 껴안고 울고 있었다.

그때 알아차렸다. 이 만남, 우정, 기쁨을 일본의 친구들에게 전하자고.

저는 귀국 후 한국을 좋아하지 않는 친구를 만나서 이번 여행의 기쁨을 말했다. 친구는 감탄하며 "나라가 아니고 사람이구나" 라고 말했다.

말 그대로이다.

저는 더 한국어 공부를 해서 많은 한국인 친구를 사귀고 그 기쁨을 일본인에게 알려 가자! 그것이 내가 해야 할 일이다.

이 여행은 제 인생의 터닝 포인트가 되었다.

佳作

한국 사람으로 보이고 싶어서

矢内優香〔東海大学〕

작년 여름 방학에 나는 한국으로 1 개월 동안 단기 유학을 갔다. 지금까지 배운 것을 최대한 살려서 현지 사람과 한국어로 많이 이야기하고자 하는 의욕으로 넘쳤다. 하지만 현실은 전혀 달랐다.

유학 중에 일본인 친구들도 여섯 번이나 명동에 갔는데 그때 먼저 생각한 것은 일본인 관광객이 너무 많다는 것이었다. 지나가는 사람은 모두 일본어로 이야기하고 있어서 '어? 여기는 일본인가?' 라고 느껴졌다. 우리가 길을 걸으면 가게의 점원들은 일본어로 우리에게 말을 걸어 왔다. 한국 사람들의 친절한 행동일 수도 있겠지만 현지에서 한국어를 별로 쓸 수 없는 것은 너무 아쉬웠다.

우리가 일본에서 한국 사람인지 일본 사람인지 아는 것처럼 명동의 점원들도 우리가 일본 사람이라는 것을 한눈에 아는 것 같았다. 우리들은 어떻게든 한국 사람으로 보이도록 해 보자고 했다. 그래서 이번에는 현지인과 일본인 관광객은 무엇이 다를까라는 관점에서 명동을 걸어 보았다. 기숙사로 돌아와서 친구들도 논의한 결과 다음의 5 가지 특징이 나타났다.

1. 두리번거리면서 걷지 않는다.
2. 건물을 쳐다보지 않는다.
3. 지도를 보면서 다니지 않는다.
4. 일본어를 말하지 않는다.
5. 화장과 복장을 한국 사람처럼 한다.

지금까지 우리들은 사진이나 잡지에서 보고 화장과 복장을 흉내 내고 있었지만, 현지의 젊은 여성들을 보고 그날 산 화장품을 사용해서 한국 사람처럼 보이도록 애썼다. 그리고 무엇보다 한국인처럼 곱고 하얀 피부를 만들기 위해서 선크림을 많이 발랐다.

시행 착오를 거쳐 여섯 번째 명동에 갔을 때 마침내 점원들은 일본어로 말을 걸어 오지 않았다. 처음에는 잘 알아듣지 못하는 말도 있었지만, 가게에서 계산할 때 포인트 카드를 가지고 있는지 봉지는 필요한지 한국어로 말을 걸어 와도 점점 알게 되었다. 한국어로 의사소통을 할 수 있다는 게 너무 기뻤다.

유학에서 돌아온 지금은 대학교에서 작년보다 많은 한국어 수업을 듣고 있다. 예전과는 달리 적극적으로 이야기를 취할 자신이 있기 때문에 한국어를 말할 때 잘못 말할까 봐 겁이 나지는 않는다. 왜냐하면 완벽하게 문법이나 단어가 맞지 않더라도 상대는 내가 전하고 싶은 것을 이해 줄 때가 유학 중이나 수업 중에도 많이 있었기 때문이다.

하지만 한국에 갔을 때는 한국 사람으로 보이고 싶고 한국어로 말했을 때 일본 사람이라는 것을 모를 정도로 잘하고 싶다. 그러기 위해서 앞으로도 더 열심히 한국어를 공부할 것이다.

最優秀賞

両角勝彦〔東京都〕

マッコリに酸いキムチ添え夏座敷

優秀賞

中野弘樹〔埼玉県〕

肩寄せて　夜景に誓う　南京錠

鈴木哲也〔埼玉県〕

知恵の輪を　ハングルみたいと　孫は言う

佳作

村上瑛海〔上智大学〕

思い出す　チヂミとマッコリ　雨の音

近藤紀巳〔岐阜県〕

頬緩む　ツツジのかんざし　磨崖仏

青柳婦美子〔栃木県〕

ハングルが　読めて記号じゃ　なくなる日

藤野美保子〔神奈川県〕

伽耶琴の　山肌わたる　染み入る音

最優秀賞

柿沼新菜〔上智大学〕

작은 어학당 하나의 교실에서 세계를 본다

優秀賞

辰見京香〔富山高等専門学校〕

엄마와 함께 막걸리를 마시는 스무살 생일

坂原瑞穂〔東京都〕

깜짝 놀랐다 완벽했던 한국말 어젯밤의 꿈

佳作

田中優子〔長崎県〕

무지개처럼 연꽃 등불 활짝 핀 비 갠 불국사

大島若子〔福岡県〕

낙지 볶음을 먹자마자 곧바로 팥빙수 가게

岸本みさを〔東京都〕

농부들 함성 장구소리 북소리 춤추는 단풍

南野成一〔大阪府〕

나이 먹어도 배우는 마음은 언제나 청춘

駐日韓国文化院 www.koreanculture.jp

駐大阪韓国文化院 www.k-culture.jp